山形県埋蔵文化財調査報告書第60集

うぐいす沢遺跡

第2次発掘調査報告書

1982

山　　形　　県

山形県教育委員会

うぐいす沢遺跡

第２次発掘調査報告書

昭和57年２月

山　　形　　県

山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和56年度に実施した一般県道中山―三郷―寒河江線の道路改良工事に伴うバイパス工事にかかる第２次「うぐいす沢遺跡」の発掘調査をまとめたものであります。

昭和55年度に実施された第１次調査では、縄文時代中期を主体とした当時の人々の生活を物語る多くの出土品や生活の跡などが発掘され、先人の歴史をたどる貴重な資料を得ることができました。今次の調査は、先の調査に引き続き行なわれた第２次の調査でありますが、今回は、縄文時代後期末葉を主体とする先人の生活の跡、出土品が発見されました。２次に亘る調査で、うぐいす沢遺跡は長い間人々の生活が営まれた貴重な遺跡であることがわかりました。

近年、埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。諸開発事業は県民福祉の向上を目的としたものでありますが、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には多くの問題が山積されております。開発に伴う遺跡の破壊は全国的な問題ともなっております。開発と保存の調整は重要な課題であり、県教育委員会においては一層の努力を重ねてきているところであります。事前の緊急調査もそのひとつの結果であります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終りに、調査にあたって適切な御指導と多大な御協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げるものであります。

昭和57年２月

山形県教育委員会

教育長　大竹正治

例　　言

1　本報告書は、山形県土木部の委託を受け、山形県教育委員会が昭和56年度に実施した、県道中山―三郷―寒河江（さがえ）線道路改良事業に係るうぐいす沢遺跡の発掘調査報告書である。調査期間は、昭和56年９月１日から10月16日までの実質31日間である。

2　調査にあたっては、寒河江市教育委員会・山形県土木部道路建設課・寒河江建設事務所の関係機関並びに地元地区の方々の協力を得た。記して謝意を表する。

3　調査体制は下記の通りである。

調 査 主 体　山形県教育委員会

調 査 担 当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　佐々木洋治（主任調査員）　長橋　至（現場主任）　阿部明彦（調査員）

〔山形県教育庁文化課〕

事　務　局　事務局長　　浜田　清明

事務局長補佐　荻野　和夫

事務局員　　設楽周一郎　田内糸子　　〔山形県教育庁文化課〕

4　挿図縮尺は、遺構の住居跡については60分の１、土壙は10分の１・60分の１、その他各挿図にはそれぞれスケールを示した。土器拓影図は３分の１とした。遺物写真は、基本的には２分の１である。（図版４・５については３分の１）

5　挿図及び本文で用いた記号は次のようになる。ＳＴ―住居跡、ＳＫ―土壙、ＳＤ―溝跡、ＥＰ―柱穴、ＥＬ―炉跡、ＥＤ―周溝、ＲＱ―石器、Ｆ―遺構覆土。

6　本報告書の作成は、長橋　至・阿部明彦が担当した。（長橋―第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章１遺構・第Ⅳ章、阿部―第Ⅲ章２遺物・第Ⅳ章遺物について　をそれぞれ執筆した。）
全体については、佐々木洋治が総括し、編集については渋谷孝雄があたった。

挿図・図版の作成にあたっては、黒金佳子・渡辺敬子・吉野映子・前田和子・清野匡子がこれを補助した。

目　次

Ⅰ　**調査の経緯**

1　調査に至る経過……1

2　調査の経過……1

Ⅱ　**遺跡の概観**

1　遺跡の立地と環境・周辺の遺跡…5

2　遺跡の層序……6

3　遺構・遺物の分布……7

4　第1次調査の概要……8

Ⅲ　**遺構と遺物**

1　遺構

（a）A地区……11

（b）B地区……11

（c）C地区……13

住居跡……15

土　壙……23

溝　跡……26

2　遺物

（a）土　器……28

（b）石　器……34

Ⅳ　**ま　と　め**……37

挿図目次

第1図　遺跡全体図……2

第2図　うぐいす沢遺跡位置図……4

第3図　基本層序……6

第4図　第1次調査遺構配置図……8

第5図　B地区遺構配置図……11

第6図　C地区遺構配置図……13

第7図　第1・2・3号住居跡……17

第8図　第4・5号住居跡……19

第9図　第6号住居跡……20

第10図　第7号住居跡……21

第11図　2号土壙……23

第12図　77号土壙……25

第13図　75号溝跡・79号土壙……27

第14図　土器分類概念図……29

第15図　土器択影（1）……30

第16図　土器択影（2）……31

第17図　C地区包含層出土　概念図……38

図版目次

図版１　遺跡遠景・遺跡近景…… 3
図版２　遺跡調査前状況…… 5
図版３　基本層序…… 6
図版４　第１次調査出土遺物…… 9
図版５　第１次調査出土遺物……10
図版６　Ｂ地区プラン・完掘状況……12
図版７　Ｃ地区10～12－４～７Ｇプラン14
図版８　ＳＴ１・２・３……16
図版９　ＳＴ４・５・６・７・ＳＤ75…22
図版10　ＳＫ２……24
図版11　ＳＫ77……25
図版12　ＳＫ77出土遺物……25
図版13　ＳＫ62出土遺物……25
図版14　ＳＤ75……26
図版15　出土土器（１）……32
図版16　出土土器（２）……33
図版17　出土石器（１）……35
図版18　出土石器（２）……36
図版19　出土石器（３）……37
図版20　赤焼土器・須恵器……37

附表１　周辺の遺跡…… 4
附表２　遺構内出土遺物数一覧…… 7
附表３　表土・包含層出土遺物数一覧… 7
附表４　うぐいす沢遺跡出土石器一覧…35
附表５　山形県縄文時代後晩期住居跡発見例……40

Ⅰ　調査の経過

1　調査に至る経過

うぐいす沢遺跡をはじめとする最上川の段丘上一帯は以前から土器や石器が多く採集されることで知られ、地元の研究者・同好の方々によって収集されている。本遺跡においても多くの遺物が採集され、縄文時代中期を主体とする遺物包蔵地として知られていた。

昭和55年度以降、本遺跡の一部が県道改良事業に係ることになり、県教育委員会では昭和54年10月に遺跡詳細分布調査を実施し、その内容・規模・性格を明らかにした。その結果に基づき、県教育庁文化課では、県土木部道路建設課・寒河江建設事務所等の諸機関と協議・調整をおこない、寒河江市教育委員会の協力を得て、昭和55年７月～９月に第１次発掘調査（県道中山―左沢線道路改良工事に伴う緊急発掘調査）を実施し、縄文時代中期後半の住居跡・溝跡・土壙群や多くの遺物を検出・発掘した。

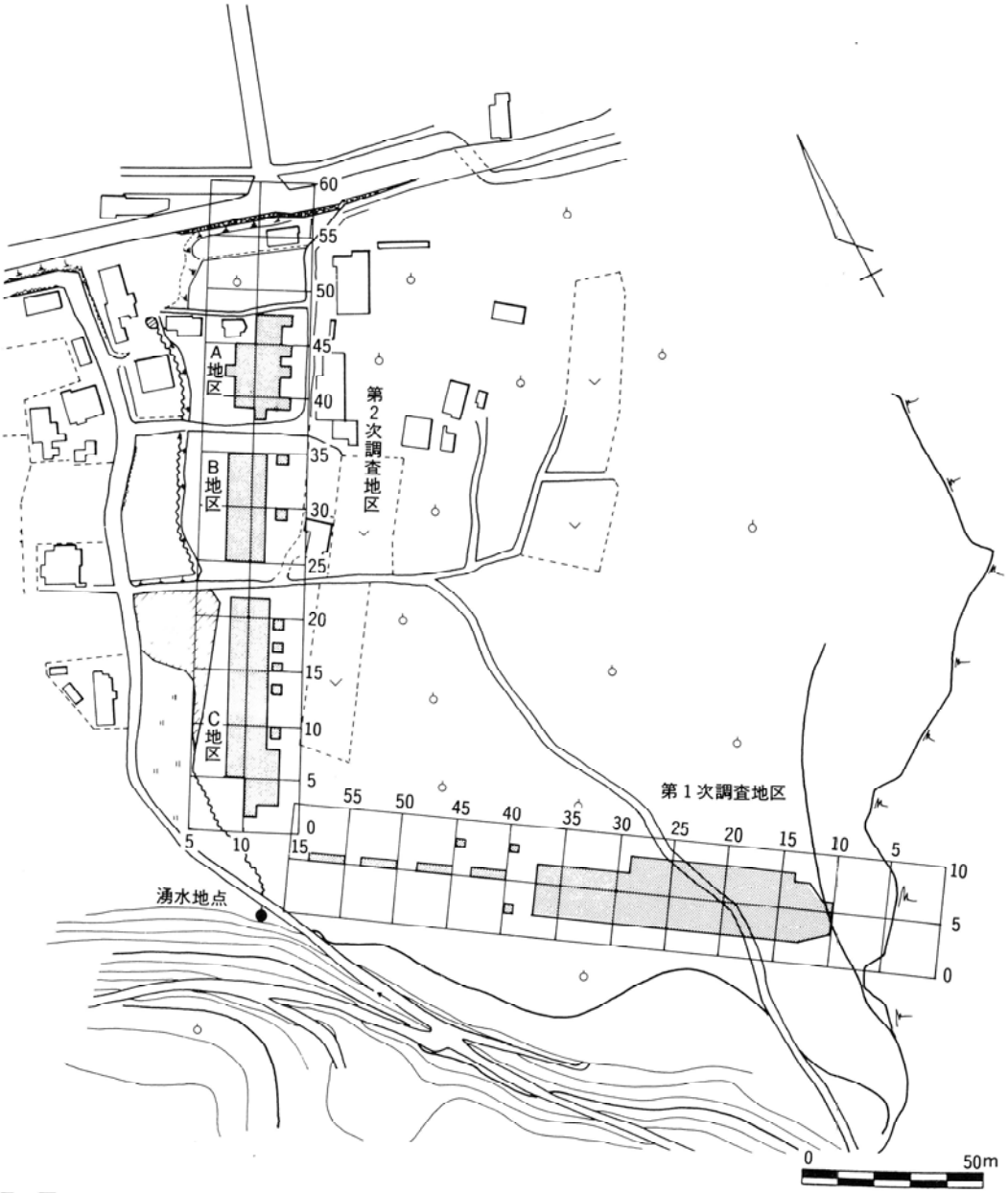
今年度は第２次発掘調査（県道中山―三郷―寒河江線道路改良工事に伴う緊急発掘調査）[註１]で、第１次調査の間に実施した当該地区の遺跡詳細分布調査の結果に基づいて実施されたものである。上記関係諸機関の他、地権者・地元地区民の方々の協力を得て、昭和56年９月１日から10月16日まで記録保存に資するため、山形県埋蔵文化財緊急調査団が発掘調査を実施した。

2　調査の経過

調査は道路改良工事に係る部分（幅約20m・長さ約150m・対象面積約3000m²）についてのみ実施した。グリッドは、計画道路のセンター杭列を基準にＹ軸を設定し、Ｘ軸はＹ軸と直交する方向にとった。Ｙ軸はＮ―27°―Ｗを計る。（１グリッドは３×３m）

対象地区が道路であり、センターが第１次、第２次とも一直線であるため、調査の進行、作業能率を考慮し、それぞれ別々のグリッドを設定した。第２次調査のグリッドの呼称はＸ軸番号―Ｙ軸番号とした。

グリッド設定後、遺構・遺物の分布状況を確認するため、グリッドに沿って３×３m・３×６mのトレンチを３～６m間隔で入れた。その結果、最上川に面する北側の段丘縁辺付近には遺構・遺物はほとんど認められず、対象地区南半部に比較的多く遺構・遺物が検出された。また、この段階で、調査区内の時期は、当初予想していた縄文時代中期後半ではなく、縄文時代後期末葉を主体とすることが判明した。精査地区は道路センターを中心に北からＡ・Ｂ・Ｃの３地区に分け、遺構・遺物の密集するＣ地区を中心に調査を進めた。特にＡ地区は地山層まで極めて浅く、また攪乱等も認められたためプランの確認で調査を中止した。尚、10月13日には現地説明会を催し、多数の市民の参加を得た。



概　要

第1次調査　精査面積　約1500㎡

第2次調査　精査面積　A地区318㎡　　B地区422㎡　　C地区627㎡

第1次調査区域　現状　畑地　果樹

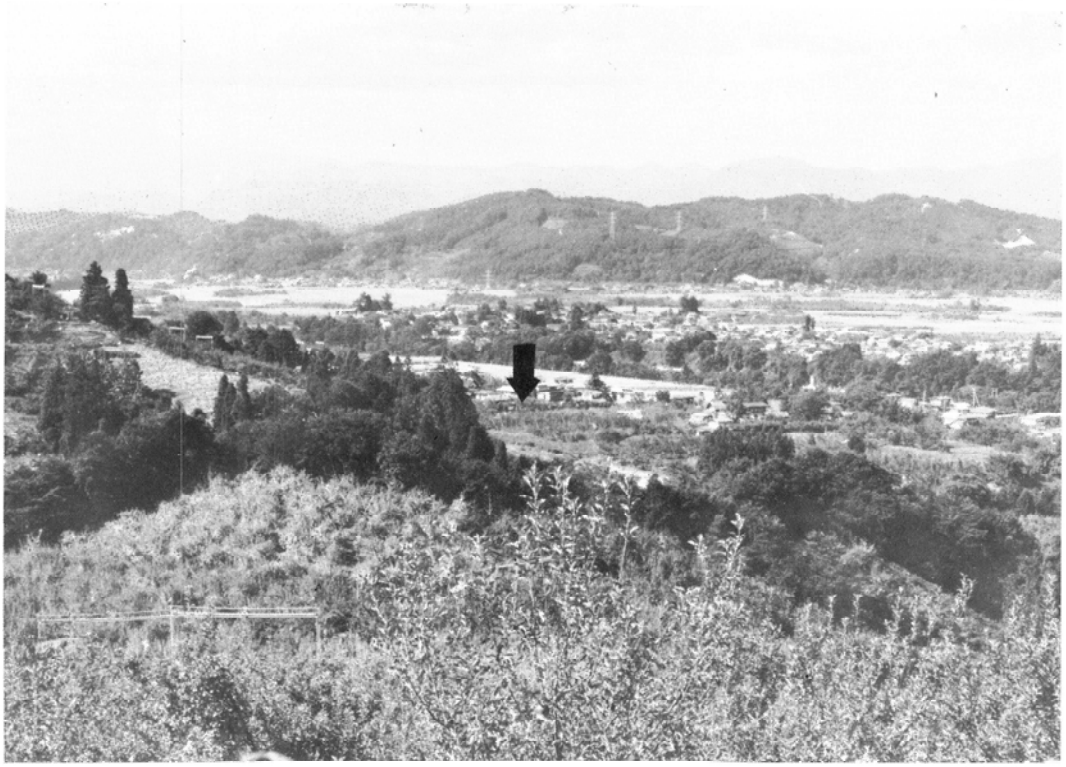
第2次調査区域　現状　果樹　各地区間に現使用道路あり。

第1次調査グリッド基点　県道中山左沢線計画杭No.78→5—35グリッド

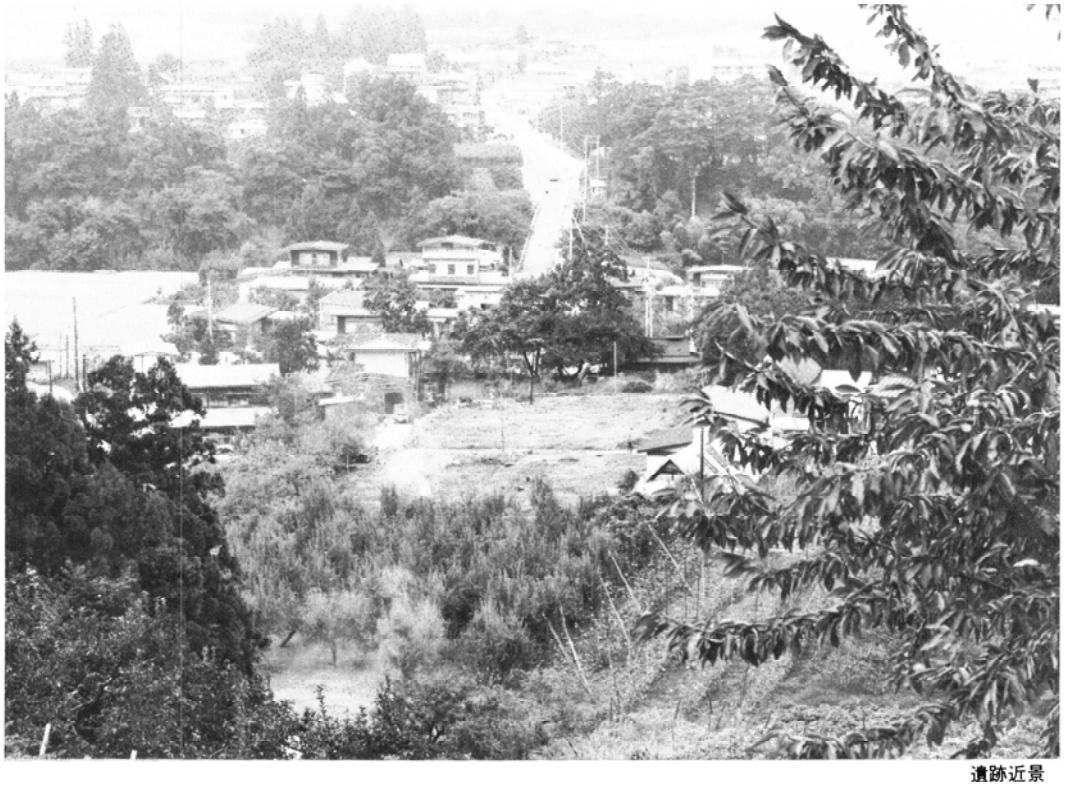
第2次調査グリッド基点　県道中山・三郷・左沢線計画杭No.0→10—0グリッド

第1図　遺跡全体図

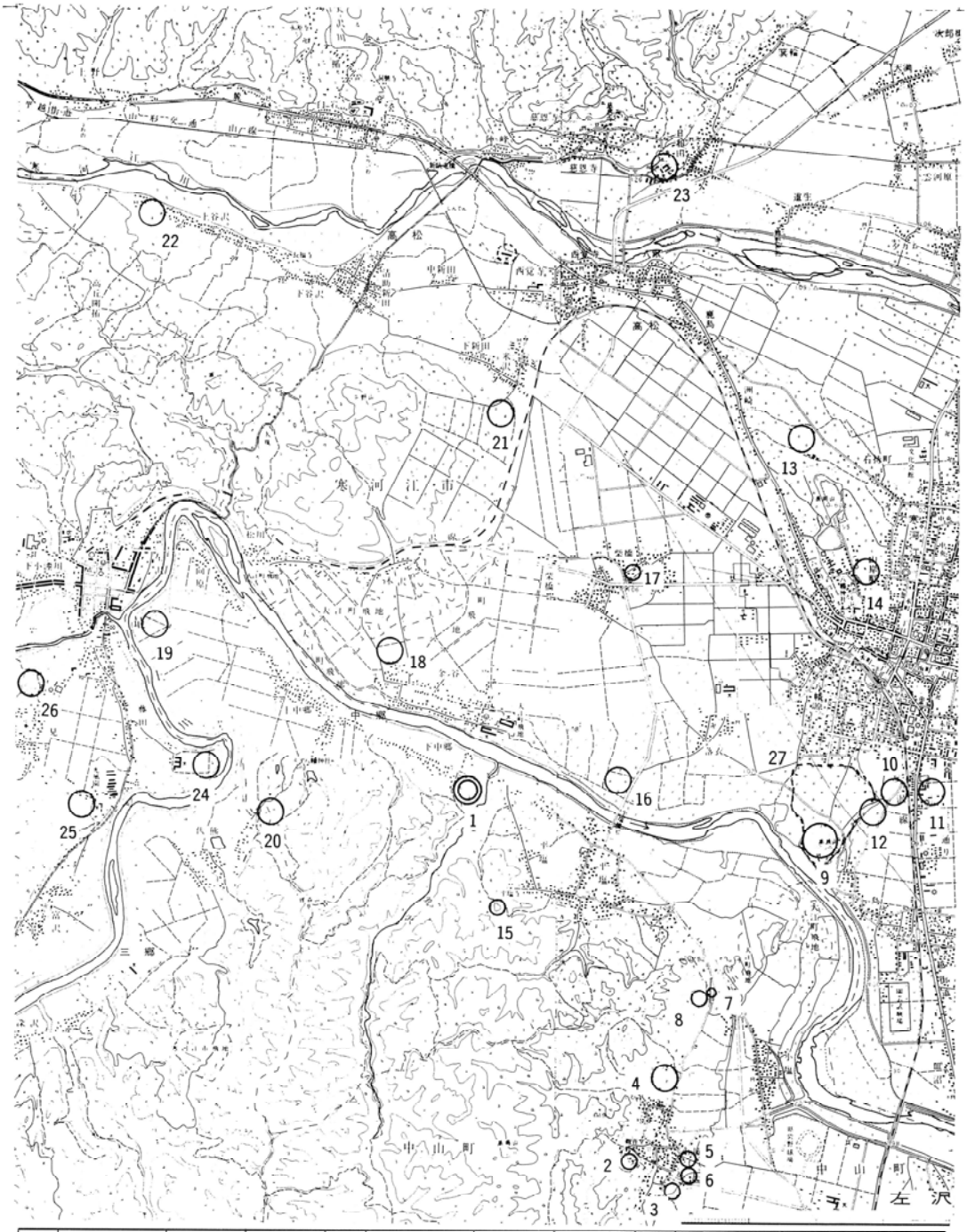
図版 1



遺跡遠景



遺跡近景



番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	うぐいす沢	縄文	集落	10	石田A	旧石器・縄文	集落	19	向原	旧石器・縄文	集落跡
2	影浦	〃	〃	11	石田B	旧石器	〃	20	明神山	旧石器	〃
3	岡境	縄文・平安	〃	12	三条	縄文・平安・中世	〃	21	平野山古窯群	平安	窯跡
4	松荷	平安	〃	13	石持原	縄文	〃	22	谷沢	縄文	集落跡
5	八幡前	〃	〃	14	山岸	〃	〃	23	日和田	〃	〃
6	壇の腰	〃	〃	15	平塩経塚	室町	経塚	24	藤田原	〃	〃
7	塩の原	縄文	〃	16	落衣長者屋敷	平安	集落	25	藤田窯	平安	窯跡
8	松岡山	〃	〃	17	柴橋窯	〃	窯跡	26	小見	縄文	集落跡
9	高瀬山遺跡群	縄文～中世	集落・古墳他	18	金谷原	旧石器	集落	27	高瀬山遺跡群(新規)	旧石器～中世	〃

第2図　うぐいす沢遺跡及び周辺の遺跡
表―1　周辺の遺跡

II　遺跡の概観

1　遺跡の立地と環境・周辺の遺跡

うぐいす沢遺跡は、村山平野の南西部、白鷹山より延びる丘陵の一部、最上川によって形成された河岸段丘上に位置している。遺跡は北側を最上川、東側を鶯沢川によって限られたフラットな面に立地し、西側は、やや緩傾斜しながら低くなっていく段丘に続く。標高は約108m～110mを計り、最上川の水面からは約６～８mの比高差となっている。現状は大部分が果樹畑で、遺跡南西端に一ケ所湧水地点がある。

周辺にはやはり最上川の段丘上に多くの遺跡が現在までに発見されている。旧石器時代は、金谷原遺跡(18)、明神山遺跡(註2)、向原遺跡(20)などが知られている。向原遺跡・高瀬山遺跡(註3)(19)では大木10式に伴う住居跡が検出されている。また、本遺跡対岸の柴橋小学校グランド造成の際、大木10式の浅鉢が出土している。縄文時代前半の時期や弥生時代の遺跡はあまり確認されていないが石田遺跡(9)(註4)では、晩期及び弥生の遺物が出土している。奈良・平安時代以降になると、集落跡(註5)の数は減少するが、村山地方の代表的窯跡(10・11)として平野山古窯跡(註6)や柴橋古窯跡(註7)などが現在までに確認・調査されている。尚、昭和55年９月、56年７月及び56年12月の分布調査により、高瀬山一帯に旧石器～中世に及ぶ多くの遺跡が新規に発見された。(21)(註8)(註9)

図版２　遺跡調査前状況

2　遺跡の層序

本遺跡は、最上川によって開析された河岸段丘上に立地し、全体として南～南西側から北～北側へ緩傾斜している。今次調査区域の西側は、遺跡南西端に位置する湧水地を基点としたような形で小谷戸が南北に走り、低湿地となっている。

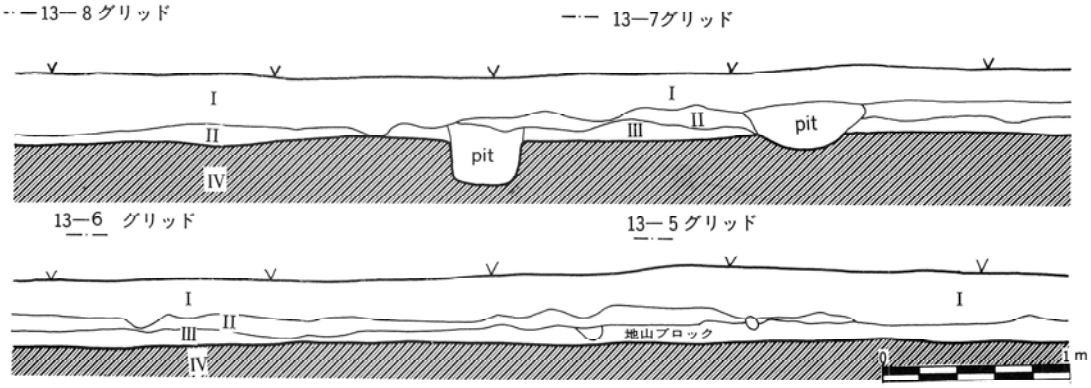
第１次調査区域（遺跡の南東側～南西側の山際・第１図遺跡全体図）では、基本的には表土層―黒褐色土層―暗褐色土層―黄褐色土層（地山・遺構確認面）となっており、遺跡西側（今次調査区域南端部付近）では、黒褐色土層及び暗褐色土層の堆積が比較的厚い状況を呈していた。今次調査区域は、上述の通り、すぐ西側に小谷戸が走り、土層の堆積状況は、若干異なる様相を示している。特に、第１次調査で認められた暗褐色土層はほとんど見られず、黒褐色土層の下位には黄褐色地山層への漸位層の堆積が薄く認められた。

第Ⅰ層　畑地・果畑による耕作土。

第Ⅱ層　黒褐色粘質微砂　炭化粒子、風化礫を少量含み、若干の遺物も含む。第１次調査の第Ⅱ層（黒褐色土）と共通するものと考えられる。

第Ⅲ層　暗黄褐色粘質微砂　まだらに地山の小ブロックを含む漸位層。尚、Y軸20グリッド以北では、第Ⅱ・第Ⅲ層とも攪乱のため全く認められない。

第Ⅳ層　暗黄褐色粘質微砂　ローム質でやや砂質に富む。遺構確認面。



第３図　基本層序

図版３　基本層序

（土層注記）

Ⅰ　暗褐色土（耕作土）

Ⅱ　黒褐色粘質微砂（炭化粒子・若干の遺物を含む。）

Ⅲ　暗黄褐色粘質微砂（地山Ⅳ層への漸位層と考えられる。まだらに地山小ブロックを含む。）

Ⅳ　黄褐色粘質微砂（部分的に明褐色の色調となる。粘性の強い部分もある。遺構確認面）

3　遺構・遺物の分布

精査地区は、北からＡ・Ｂ・Ｃ地区と呼称する。Ａ・Ｂ両地区は、近世～近現代にかけて、作付や住居の建築等で大部分が攪乱を受けており、遺構は、そのほとんどが破壊された可能性がある。土層の堆積状況も耕作土及び表土層が10～20cmみられる他、遺物包含層も認められず、すぐ地山層へと達する。

今次の調査では、Ｃ地区に縄文時代後期の遺構が集中的に検出された。住居跡は、Ｙ軸８グリッド以南に多数のピット群がみられ、少くとも３棟の住居跡が存在するものと考えられる。また、Ｙ軸12～20グリッドでは、ＳＤ75をはさんで４棟の住居跡が南北に検出された。溝跡は、Ｙ軸12～15グリッド内で、やや蛇行しながら東西に走る、幅１ｍ前後の溝跡（ＳＤ75）が検出され、さらに、この溝跡に重複して３基の土壙も検出された。この他、９－４グリッドでは、径約１ｍ・深さ30cm前後の袋状の土壙１基が検出され（ＳＫ２）、土器片が一括出土した。これらの遺構と時期は異なるが、Ｙ軸14グリッド以南に中世～近世の所産と考えられる皿状の土壙が７基検出された。

遺物は、Ａ・Ｂ地区ではほとんどみられず、Ｃ地区を中心に出土した。特に、ＳＤ75を中心とする地区、ＳＫ２及び周辺のピット群を中心とする地区の２地区に集中する。

表－２　うぐいす沢遺跡　遺構内出土遺物数一覧

遺構	土器片	石器（フレイク・チップ除）	地区	図中番号	遺構	土器片	石器（フレイク・チップ除）	地区	図中番号
SD1	3	0	C		SK63	1	0	C	
SK2	246	33	〃	（第11図）	SK67	6	6	〃	
EP4	1	1	〃	10－5Gピット	SK72	0	1	〃	
EP6	1	0	〃	C－28（第7図）	SD74	0	15	〃	RQ4 RQ5 RQ6 RQ7
EP7	2	4	〃	C－4（〃）	SD75	156	5	〃	（第13図）
EP10	1	0	〃	C－26（〃）	EP76	10	3	〃	5－7（第8図）
EP11	2	0	〃	C－23（〃）	SK77	86	9	〃	（第12図）
EP13	4	0	〃	C－41（〃）	SD6	6	0	〃	
EP16	3	1	〃	C－32（〃）	EP80	0	1	〃	10－5Gピット
EP18	0	1	〃	C－33（〃）	EP95	1	0	〃	5－4（第8図）
SK22	2	13	〃	RQ8	SK100	0	6	〃	
EP25	3	0	〃	C－51（第7図）	SK101	9	1	〃	
EP26	1	1	〃	C－1（〃）	EP140	1	1	〃	7－4（第10図）
EP28	38	0	〃	C－60（〃）	EP154	0	2	〃	RQ10 RQ11
EP33	0	2	〃	C－19（〃）RQ9	EP155	1	0	〃	10－11Gピット
EP39	1	0	〃	C－71（〃）	EP156	3	0	〃	10－5Gピット
EP47	10	1	〃	C－74（〃）	EP158	2	2	〃	C－58（第7図）
EP48	2	0	〃	C－64（〃）	EP159	2	4	〃	C－66（〃）
EP53	1	0	〃	C－80（〃）	EP160	1	5	〃	C－16（〃）
EP56	1	0	〃	C－78（〃）	EP162	3	0	〃	11－7Gピット
EP57	1	0	〃	C－85（〃）	EP171	1	0	〃	C－71（第7図）
SK61	0	3	〃	1	不明遺構	2	3	C	
SK62	0	0	〃		計	633	124		RQ→8 RM→2

表－３　表土層・包含層出土遺物数一覧

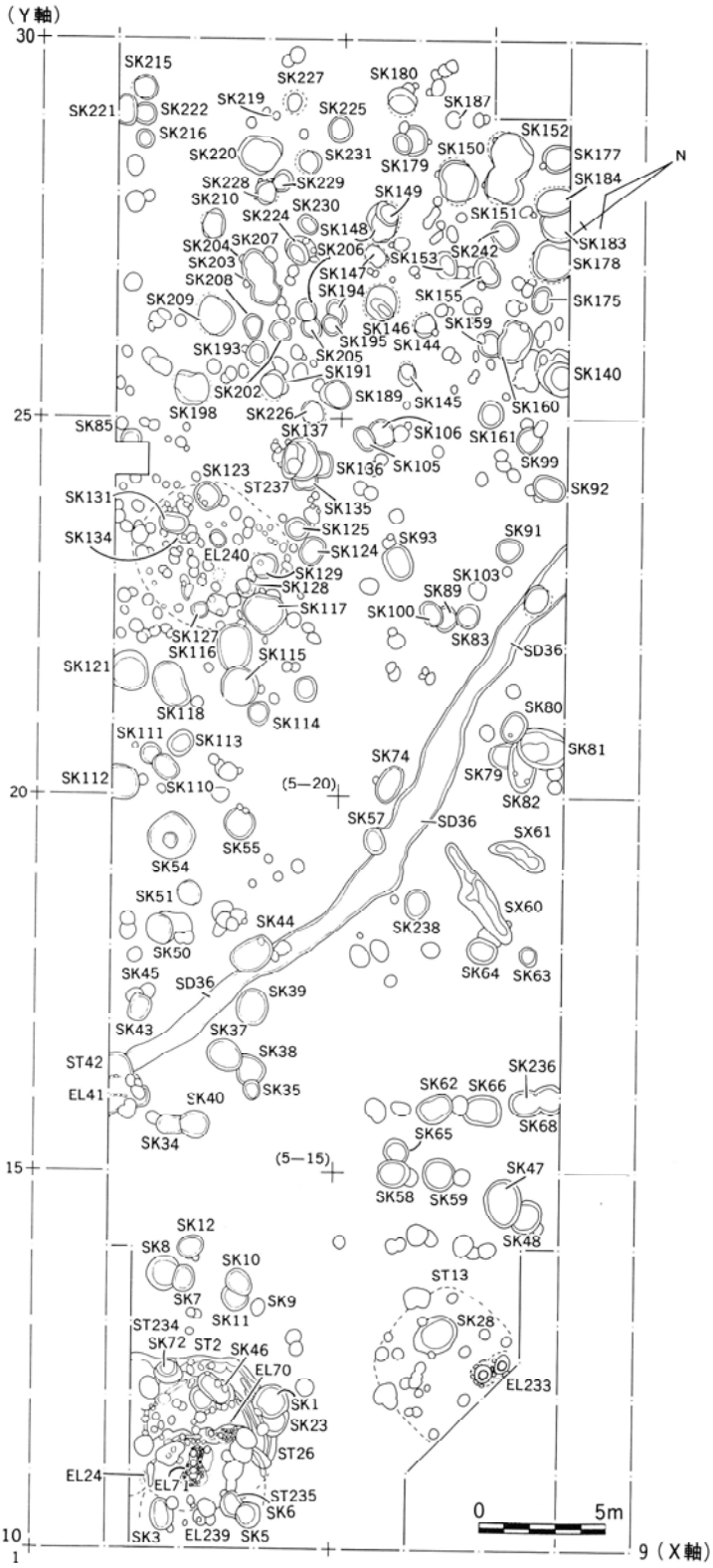
地点	土器片	石器片	時期	地区	地点	土器片	石器片	時期	地区
8－6	0	3	後期末	C	10－16	0	2	後期末	C
8－8	0	5	〃	〃	10－28	0	2	〃	〃
8－10	0	3	〃	〃	10－25～28	2	10	〃	B
8－11	1	0	〃	〃	10－40	1	6	〃	A
8－14	10	13	〃	〃	11－6	0	11	〃	C
8－35	0	2	〃	B	11－7	0	34	〃	〃
9－7	0	1	〃	C	11－8	0	2	〃	〃
9－8	1	0	〃	〃	11－10	0	1	〃	〃
9－18	2	4	〃	〃	11－12	3	2	〃	〃
9－42	0	3	〃	A	11～12－5	5	22	〃	〃
9－48	0	1	〃	A	11～12－4～3	5	29	〃	〃
10－3	5	38	〃	C	11～12－15	7	1	〃	〃
10－4	2	29	〃	〃	12－6	26	19	〃	〃
10－5	0	11	〃	〃	12－7	3	38	〃	〃
10－4～5	2	14	〃	〃	12－8	0	9	〃	〃
10－6	0	14	〃	〃	12－14	1	0	〃	〃
10－7	2	10	〃	〃	12－16	1	3	〃	〃
10－8	2	18	〃	〃	12－40	0	2	〃	A
10－9	3	0	後期末・中世	〃	A地区	2	9	〃	
10－10	0	4	後期末	〃	B地区	4	3	〃	
10～11－8	1	2	〃	〃	X－0	2	7	〃	
10～11－9～10	0	4	〃	〃					
10－14	20	12	〃	〃	計	113	403		

（註）

○遺構内より出土した遺物すべてのものを掲載した。

○ＲＱは石器、ＲＭは金属製品を示す。なお、ＲＱ、ＲＭの各番号は別表（表－４）と一致する。

○図中番号は、本報告書掲載の挿図及び挿図中の遺構番号と一致する。（Ｃ－１は第７図のピット番号1を示す。）



第４図　第１次調査遺構配置図

４　第１次調査の概要

第１次調査では、縄文時代中期後半の遺構、遺物が多数検出された。

特に大木10式期の所産と考えられる土壙群は、一時期に集中的に分布する特徴をもつ。

（ａ）遺構

竪穴住居跡８（検出６・柱穴及び炉跡からの推定２）・土壙129・溝跡１・不明ピット259・不明遺構２が確認された。

住居跡は調査区東側、うぐいす沢川寄りの緩傾斜地に６棟（５棟は重複）、調査区南西寄りの平坦地に２棟位置している。ＳＴ２・25・26・235は、３～５－11～13グリッド内に位置し、重複関係にある。ＳＴ２に伴う炉跡はＥＬ24で住居跡南東寄りに位置する複式炉である。ＳＴ25はＥＬ71を伴う多角形ないし隅丸方形のプランである。ＳＴ26もやはり複式炉（ＥＬ70）を伴い、円形のプランをもつ。ＳＴ235は一部分検出されたのみで大部分は不明である。これらの住居跡は、いづれも周溝をもち、第Ⅳ層を掘り込んで構築されている。中でもＳＴ２・

25は、複式炉の側に２本の大型の主柱穴が位置し、住居跡壁際に間隔をもって支柱穴があり、壁コーナーにそれぞれ壁柱穴がみられる。ＳＴ13は調査区南東側の傾斜地に位置する。平面形は柱穴の配列から推定して隅丸方形を呈すると考えられるが、耕作等により攪乱を受けており、遺存状態はよくない。炉跡は複々式炉であるが、攪乱のため全体は不明である。ＳＴ42は調査区の関係で約１／10を検出したに留まる。ＳＴ237は土壙との重複で明確なプランの検出はできなかったがピット列及び炉跡から楕円形を呈するものと考えられる。このＳＴ237は大木９式の所産であり、他の住居跡は大木10式の所産である。

土壙は第１次調査で得られた特徴的な遺構で、調査区全体に亘って分布している。形態は大別して３つのタイプに分けられる。Ａタイプは性格不明、Ｂタイプは土層の堆積状態から墓壙とみられ、Ｃタイプは袋状土壙となる特徴をもつため貯蔵用の施設と考えられる。時期はほとんど大木10式期である。

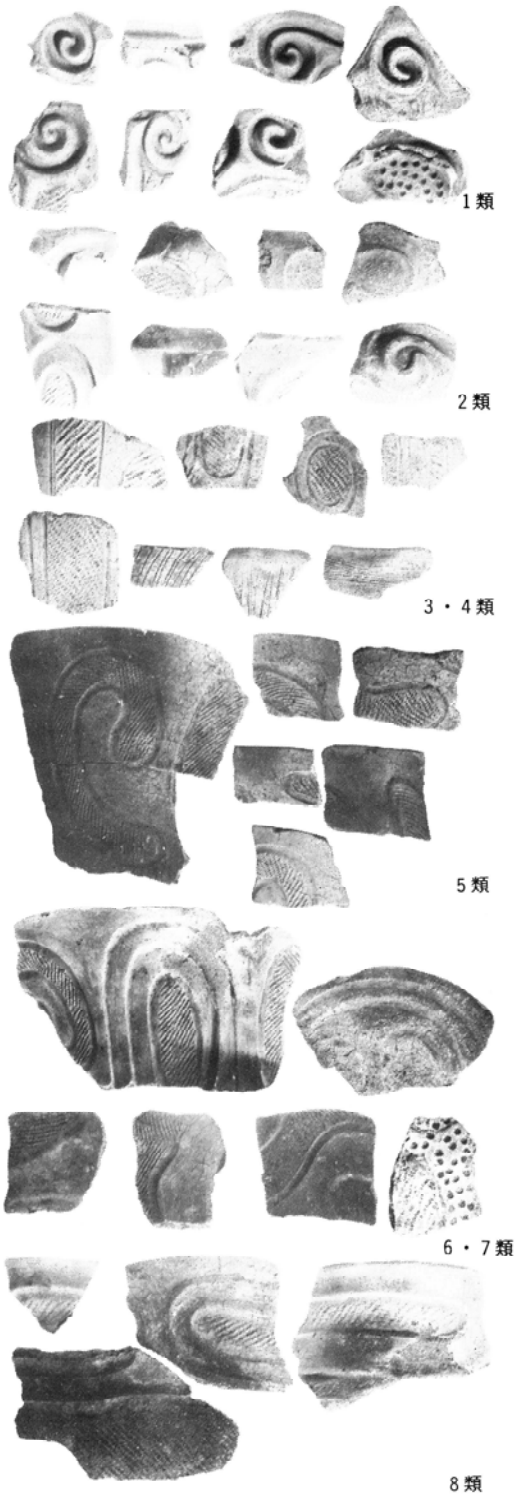
溝跡（ＳＤ36）は、ほぼ南北に弧状をなし、大量の風化礫を含み堅く踏みしめられている。性格については現段階では不明である。

（ｂ）遺物

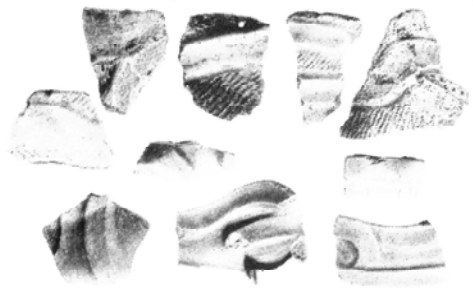
第１次調査で出土した遺物は整理箱に48箱で、縄文式土器（中期中葉～後葉）・土製品・石器・自然遺物（クルミの炭化片３点）である。遺物は、第Ⅱ層（包含層）及び遺構内覆土から出土している。

土　器：大木８式0.5％・９式24.5％・10式75％）

土製品：土偶１

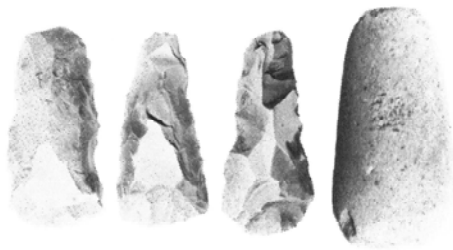


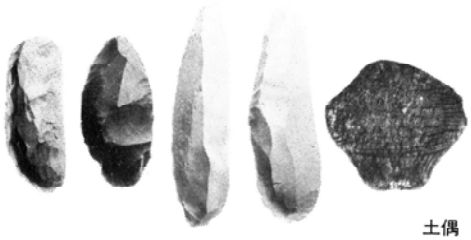
図版４　第１次調査出土遺物



9類

10類





土偶

図版5　第1次調査出土遺物

石　器：石鏃6・石錐5・尖頭器1・石匙11
打製石斧6・篦状石器5・スクレーパー16・磨製石斧1・凹石3・磨石5・石皿1・石棒2

土器　出土した土器は、描出された文様や施文技法により1類から10類まで概括的に分類している。

1類土器　渦巻文を主体とする。a類とb類に細別される。a類は大木8b式、b類は大木9a式。

2類土器　口縁部のみに渦巻文がみられる。大木9b式。

3類土器　楕円文を区画とする磨消縄文が主体となる。大木9b式。

4類土器　ヘラ状工具の先端を用い細線を施す。大木9b式。

5類土器　S字状文・C字状文が縦方向に施され充填縄文がみられる。大木10式。

6類土器　隆起帯による区画でS字状文・楕円文が縦横に連続的に走る。大木10式。

7類土器　S字状文が発展し、曲線的に横方向へ連続した文様を描出する。大木10式。

8類土器・9類土器　粘土帯を研磨・調整し、両縁が微隆起になり、さらに隆帯や沈線を施し、S字文より発展した曲線を主体に胴上半部が充填縄文となる。大木10式。

10類土器　大木9～10式に伴う粗製土器

石器　大木9～10式に伴う。量的には打製石斧・石篦が多く出土している。磨石・石皿・凹石が少ないのが特徴のひとつである。

完形土器は複式炉に伴う土器部が大半を占め、6～9類に共通する。

III　遺構と遺物

1　遺　構

（a）A地区

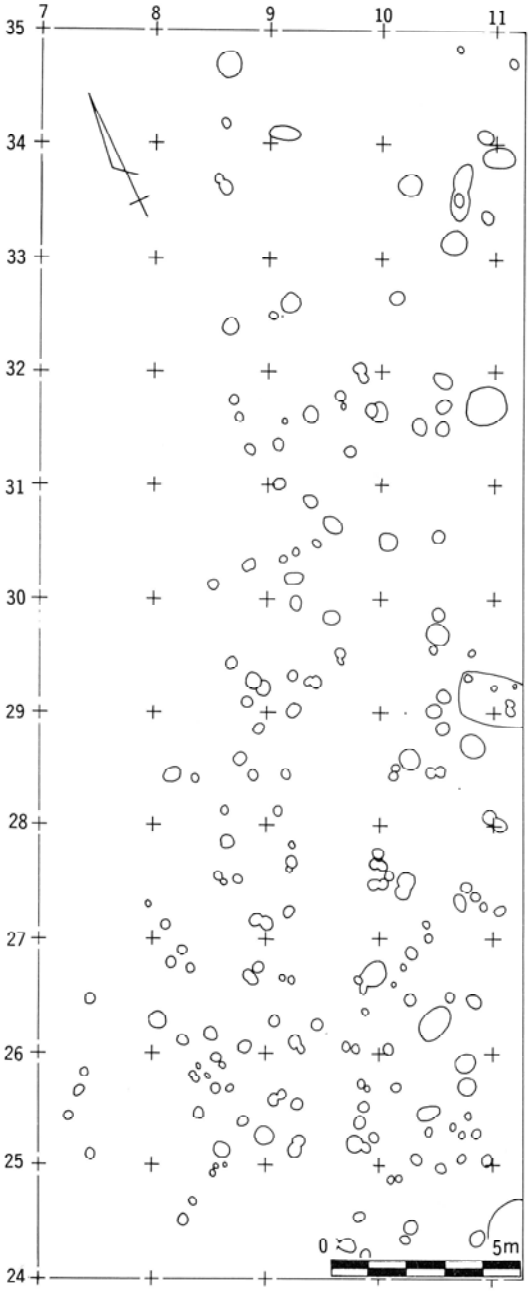
調査区域北側で、北に最上川を臨む段丘の縁辺部に位置する。調査前は、この地区を中心に遺構・遺物が検出されるものと予想されたが、表土が薄く、近現代まで耕作・住居の建造等があったことが調査途中で判明した。また、南側C地区で認められた遺物包含層も削平あるいは攪乱のため存在せず、縄文時代～近世においての遺構は、土壙1基（縄文時代）が検出されたに留まる。

そのため、調査は表土の粗剝ぎ後、面整理によるプランの確認、一部遺構の掘り下げを行った時点で中止した。遺物は表土層より縄文時代後期と考えられる土器片3点、フレイク・チップ19点が出土した。

（b）B地区

A地区とC地区の中間に位置する。7～11―25～35グリッド、約422㎡についての拡張区である。

この地区もA地区同様削平、耕作による攪乱、あるいは住居の建造等によりほとんどが破壊を受けたものと考えられる。東側に偏在する土壙は最近のゴミ穴である。また拡張区全体に散在するピットは、その覆土や形状から明らかに新しい時期のものと認められる。特に8～10―26～28にピットが集中しているが、これは近代に建設された建造物の柱穴あるいは何らかの構造物の痕跡と考えられる。遺物は表土層より縄文時代後期に属する土器片が7点、フレイク・チップが15点の他、打製石器基部（RQ34）、スクレーパー（RQ40）が出土したに留まる。



第5図　B地区遺構配置図

図版 6

B地区プラン確認状況

B地区ピット完掘状況

（c）C地区

今次調査区域南側、5～12－2～22グリッド、627m²の拡張区である。この地区のすぐ南側には湧水地点があり、現在も清水が湧き出ている。

A・B両地区でみられた表土層の攪乱、削平等はC地区ではほとんど認められず、わずかに畑地耕作の際の天地返しが部分的に、またY軸16グリッド以北で若干の黄褐色地山層の削平がみられたに留まる。土層の堆積状況についても、前述（第II章2・遺跡の層序）の通り、Y軸3～16グリッド付近までは、表土層→黒褐色遺物包含層→漸位層→黄褐色地山層と比較的良好な状態で遺存していた。

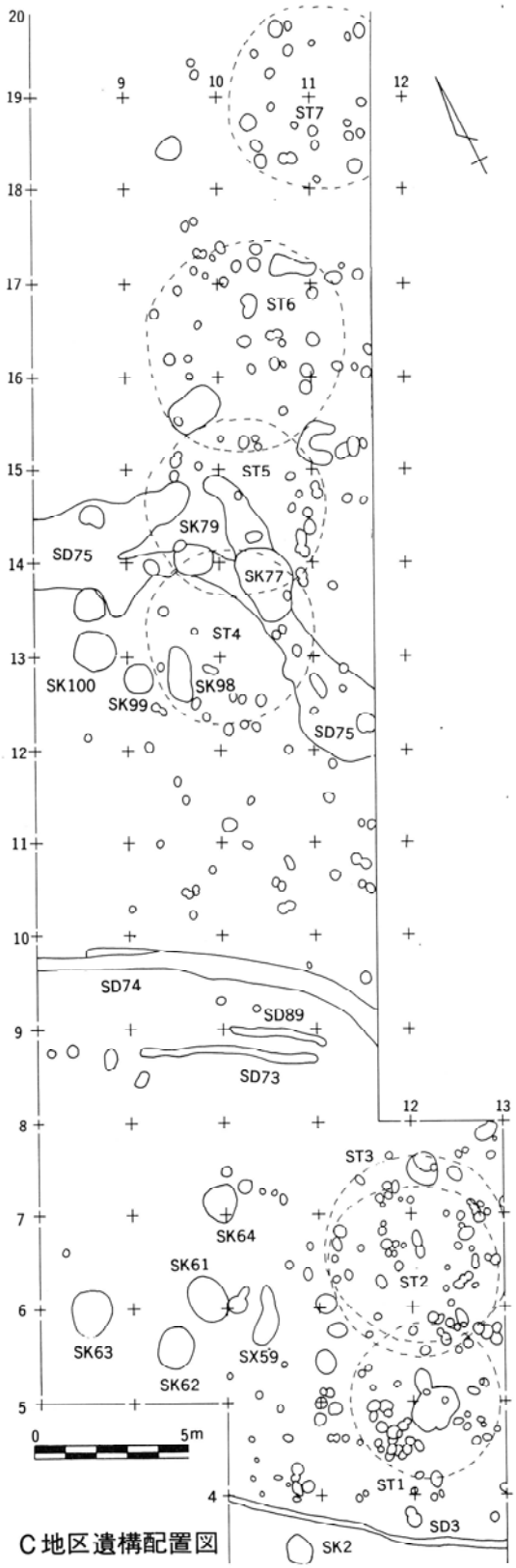
〔検出された遺構〕

住居跡　7棟　いづれも壁・周溝及び炉跡は検出されない。10～12－4～8グリッド内にさらにピットの状況から推測して1～2棟の存在が考えられるが、本報告では、覆土の状況、ピットの位置からプランを明らかにできるものについてのみ取り上げた。

土壙　縄文時代後期に属するもの4基。中世～近世に属するもの7基。

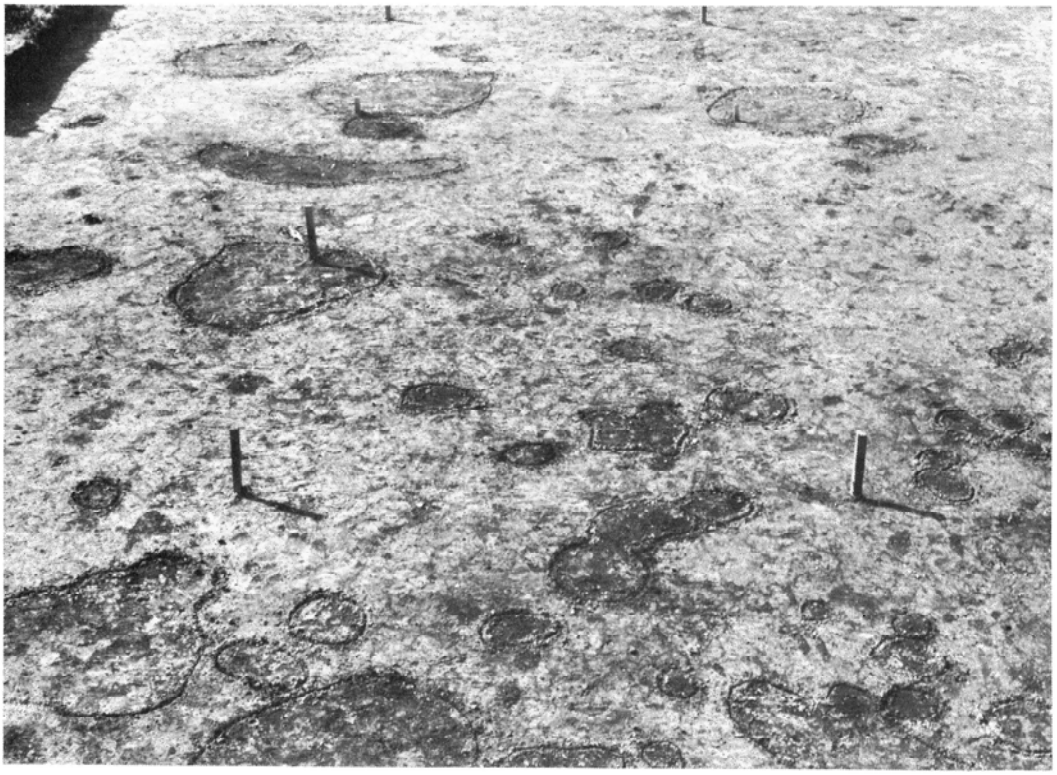
溝跡　縄文時代後期に属するもの1基。近世～近代の溝跡4基。

柱穴　約300基。内約⅓については性格が不明である。



第6図　C地区遺構配置図

図版７



Ｃ地区　10～12－４～７グリッドプラン確認状況

作業風景

（1） 住居跡

1号住居跡 （第7図・図版8）

（遺構の確認）11～12―5～6グリッドに位置する。検出面はIII層下位～IV層上面。

（平面形）ほぼ円形を呈すると考えられる。径は約4.5mを計る。

（壁・周溝）確認されない。遺構は第II層下位より構築されたと考えられるが、III層上面での精査及び拡張区壁でのセクションの観察でも壁の立上がりは認められない。

（床面・炉跡）床面及び炉跡の痕跡は明確には認められない。焼土も検出されなかった。

（柱穴）覆土の状況によりＳＴ１を構成すると考えられる柱穴を追った。本住居跡の主体となる柱穴は、基本的には暗褐色粘質微砂と微量の黄褐色地山小ブロックがまだらに混じるもので、Ｐ１～Ｐ７がこれにあたる。住居跡内にはＳＴ２・３との重複地点も含めて43のピットが検出されているが、住居自体の構造が現役段階では不明である点・この地区にさらに１～２棟の住居跡の存在も考えられる点等を考慮して、Ｐ１～Ｐ７を除くピットの存り方についての言及は避けたい。

（遺物の出土状況）ＳＴ１の位置する11～12―5～6グリッドからは、表土・包含層より土器片６・石器（フレイク・チップ）55が出土した。時期はすべて縄文時代後期末葉に比定される。また、Ｐ１・３・４・６・25・26・28・32・51の覆土より各１～５点程の遺物が出土しているが、これも縄文時代後期末葉に比定される。

2号住居跡 （第7図・図版8）

（遺構の確認）11～12―6～8グリッドに位置する。検出面はIII層下位～IV層上面。

（平面形）ほぼ円形を呈すると考えられる。径は約5.5mを計る。

（壁・周溝・床面・炉跡）いずれも検出されない。床面は、遺構確認面より５～10cm上位のII～III層にあったものと推測される。

（柱穴）暗褐色粘質微砂と少量の黄褐色地山小ブロックの混入している覆土の柱穴が本住居跡を構成する柱穴の主体となる。Ｐ８～Ｐ14がこれにあたる。

（遺物の出土状況）ＳＴ３と重複する部分が多いが、後期末の土器片が15点出土している。

3号住居跡 （第7図・図版8）

（遺構の確認）11～12―6～8グリッドに位置する。検出面はIII層下位～IV層上面。

（平面形）ほぼ円形を呈すると考えられる。径は約5.5～６mを計る。

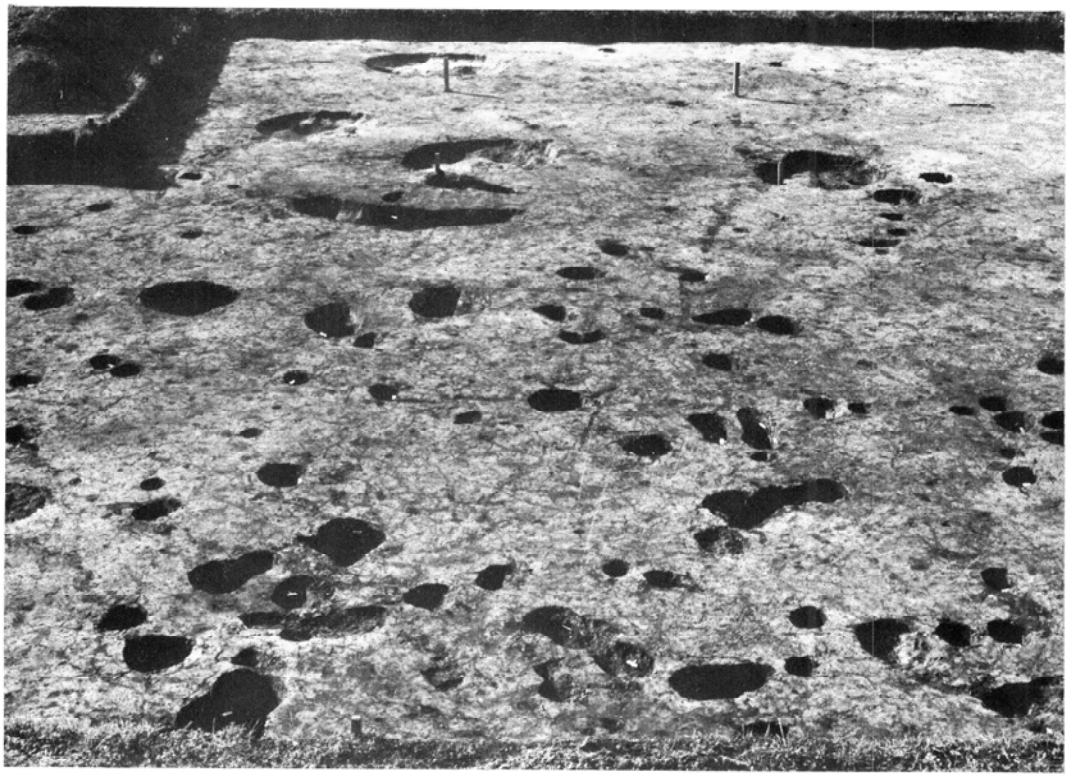
（壁・周溝・床面・炉跡）いずれも検出されない。

（柱穴）本住居跡を構成する主体となる柱穴は、黒褐色微砂と暗褐色粘質微砂及び若干の黄褐色地山小ブロックの混入がみられる覆土をもつもので、Ｐ15～Ｐ20がこれにあたる。

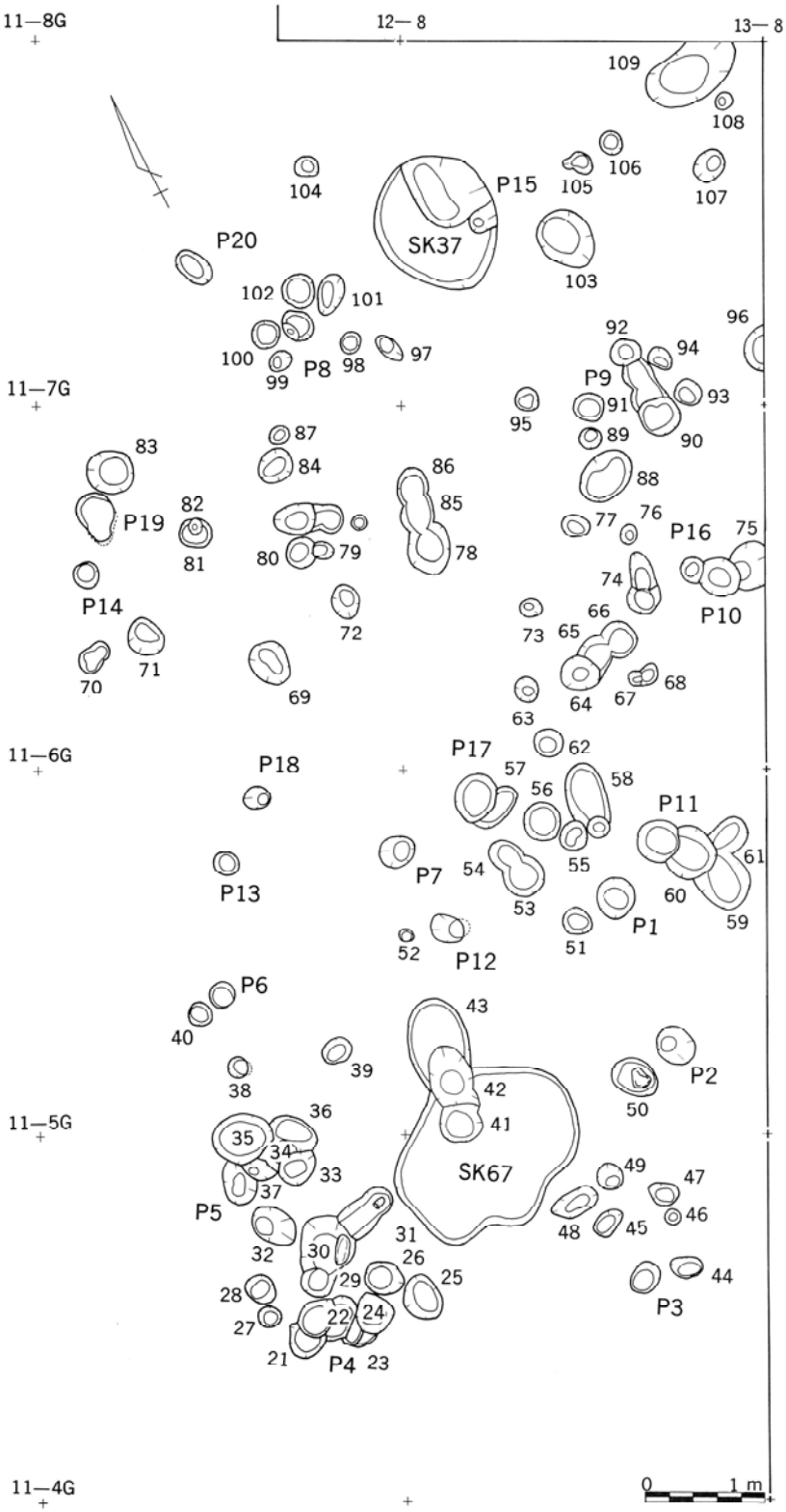
（遺物の出土状況）包含層及び住居跡内柱穴より縄文時代後期末の土器片が出土している。

図版 8

C地区　ST1・ST2・ST3 重複状況(N↑)



C地区　ST2・ST3 重複状況(E↑)



番号	深さ	番号	深さ
1	23	56	13
2	10	57	13
3	15	58	8
4	27	59	18
5	34	60	23
6	21	61	19
7	25	62	13
8	41	63	18
9	15	64	30
10	38	65	11
11	27	66	12
12	24	67	11
13	14	68	11
14	23	69	20
15	25	70	11
16	31	71	15
17	37	72	27
18	22	73	19
19	25	74	26
20	30	75	16
21	11	76	11
22	16	77	21
23	12	78	36
24	18	79	15
25	7	80	25
26	18	81	12
27	8	82	17
28	28	83	37
29	28	84	14
30	22	85	32
31	8	86	28
32	37	87	14
33	22	88	16
34	16	89	16
35	7	90	7
36	2	91	5
37	10	92	10
38	26	93	12
39	19	94	10
40	13	95	15
41	36	96	20
42	34	97	17
43	8	98	5
44	10	99	18
45	8	100	10
46	9	101	9
47	7	102	10
48	8	103	17
49	7	104	30
50	15	105	7
51	25	106	8
52	7	107	20
53	16	108	15
54	15	109	10
55	10		(cm)

第７図　Ｃ地区南端部ピット群
（第１・第２・第３号住居跡）

4号住居跡　（第8図・図版9）

（遺構の確認）C地区中央部9～10―13～14グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面。

（平面形）ほぼ円形を呈するものと考えられる。推定径約5mを計る。

（壁・周溝）検出されない。

（床面・炉跡）検出されない。Ⅱ～Ⅳ層上面までの掘り下げの段階においても炉跡（焼土もしくは焼成を受けた礫）は検出されなかった。同様に住居の掘り込みを示す壁、床面も検出されなかった。

（柱穴）黒褐色微砂と黄褐色地山小ブロックが覆土に混入する柱穴を主体とする。P4－1～P4－5がこれにあたる。SD75及びSK77と北東部で重複するため、この位置に推定される柱穴はこれらの遺構により切られているものと考えられる。本住居跡内には12の柱穴が認められる。

（遺物の出土状況）9～10―13～14グリッド表土・包含層からは、10―14グリッドを中心として土器片20・石器（フレイク・チップ）12点が出土している。本住居跡に直接伴うものではなく、SD75・SK77に関連する遺物と考えられる。本住居跡に伴う遺物は、P4－4・P4－7から出土しており、時期は縄文時代後期末葉に比定される。

5号住居跡　（第8図・図版9）

（遺構の確認）C地区中央部9～11―14～16グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面。

（平面形）ほぼ円形を呈する。推定径は約5～5.5mを計る。北側で一部ST6と重複する。また南側で、SK77・79・SD75と重複する。新旧関係は不明である。

（壁・周溝）検出されない。

（床面・炉跡）検出面がⅣ層上面のため、Ⅱ～Ⅲ層中に構築されたと考えられる床面は確認されなかった。炉跡も検出されなかった。

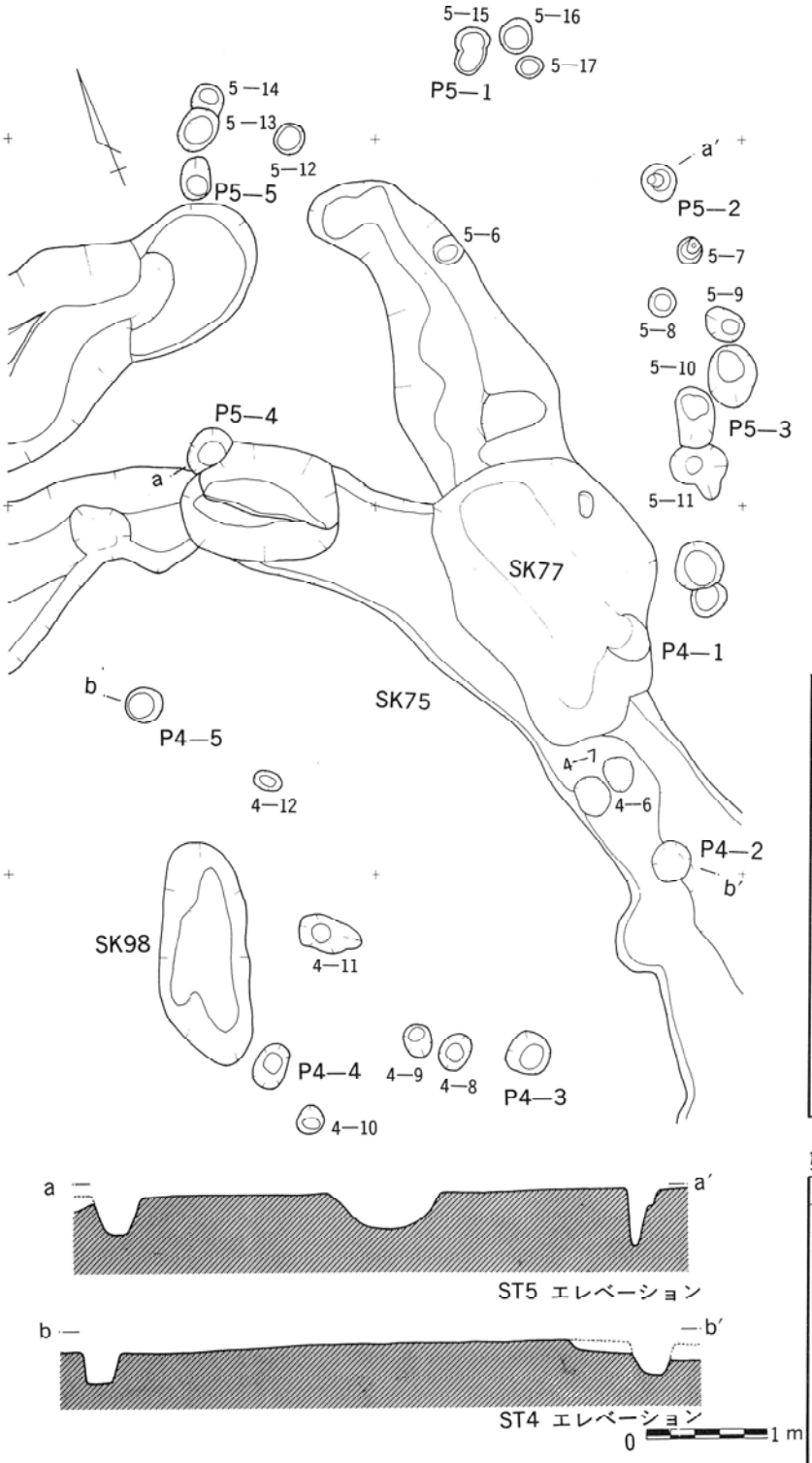
（柱穴）ST5とほぼ同様の覆土を有する柱穴が本住居跡を構成する主体と考えられる。柱穴はすべて（他の住居跡も同様）Ⅳ層を掘り込んだ状態である。本住居跡内には17個の柱穴が認められ、そのうちP5－1～P5－5が主体となるものと思われる。

（遺物の出土状況）住居跡を構成すると考えられる柱穴からは遺物は出土しなかった。南側で重複するSK77・79・75付近の包含層からは縄文時代後期末葉の遺物が出土しているが、直接本住居跡と関連するものとは考えられない。しかし、他の住居跡とほぼ同じ状況で検出されているため縄文時代後期末葉として大過ないであろう。

6号住居跡　（第9図・図版9）

（遺構の確認）9～11―16～18グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面。

（平面形）ほぼ円形を呈する。推定径は約6mを計る。



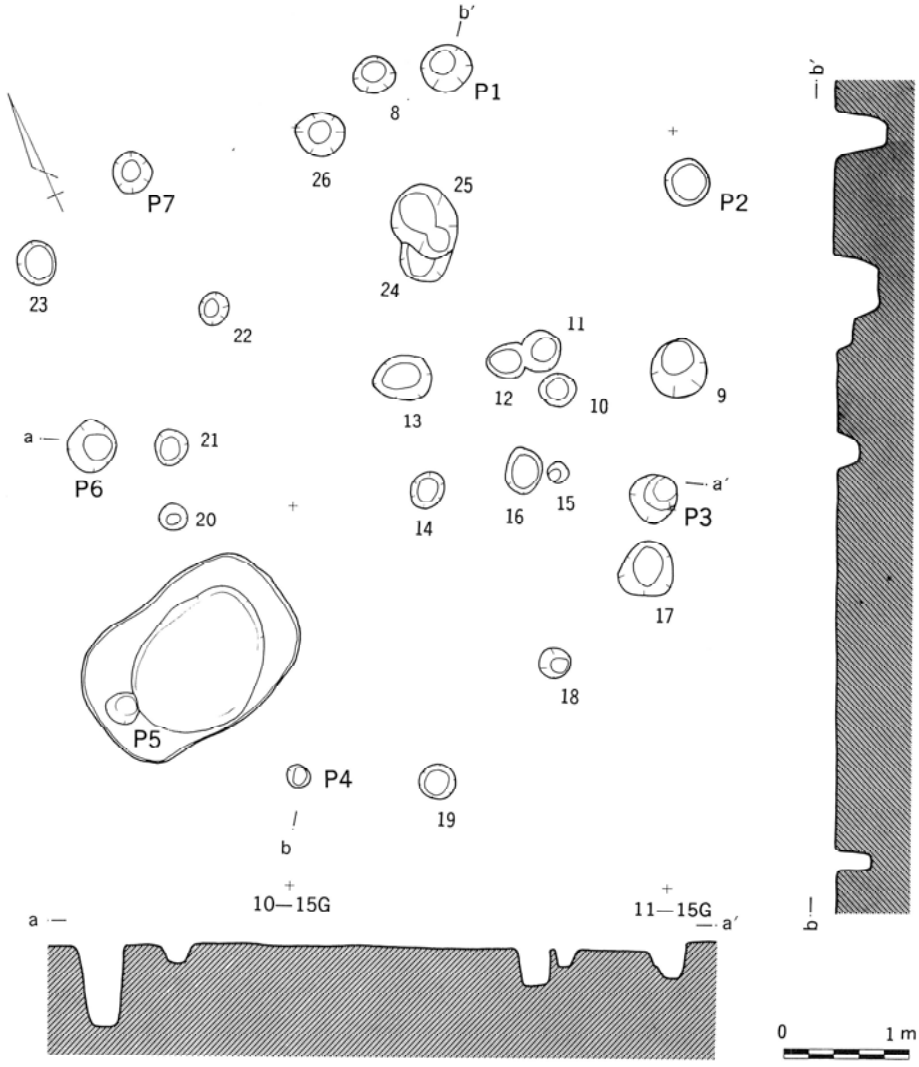
第5号住居跡

ピット番号	ピットの深さ
5－1	20cm
5－2	51〃
5－3	25〃
5－4	29〃
5－5	28〃
5－6	79〃
5－7	20〃
5－8	12〃
5－9	24〃
5－10	16〃
5－11	24〃
5－12	21〃
5－13	20〃
5－14	13〃
5－15	20〃
5－16	53〃
5－17	7〃

第4号住居跡

ピット番号	ピットの深さ
4－1	41cm
4－2	25〃
4－3	43〃
4－4	32〃
4－5	15〃
4－6	23〃
4－7	26〃
4－8	43〃
4－9	20〃
4－10	25〃
4－11	21〃
4－12	15〃

第8図　第4号・第5号住居跡



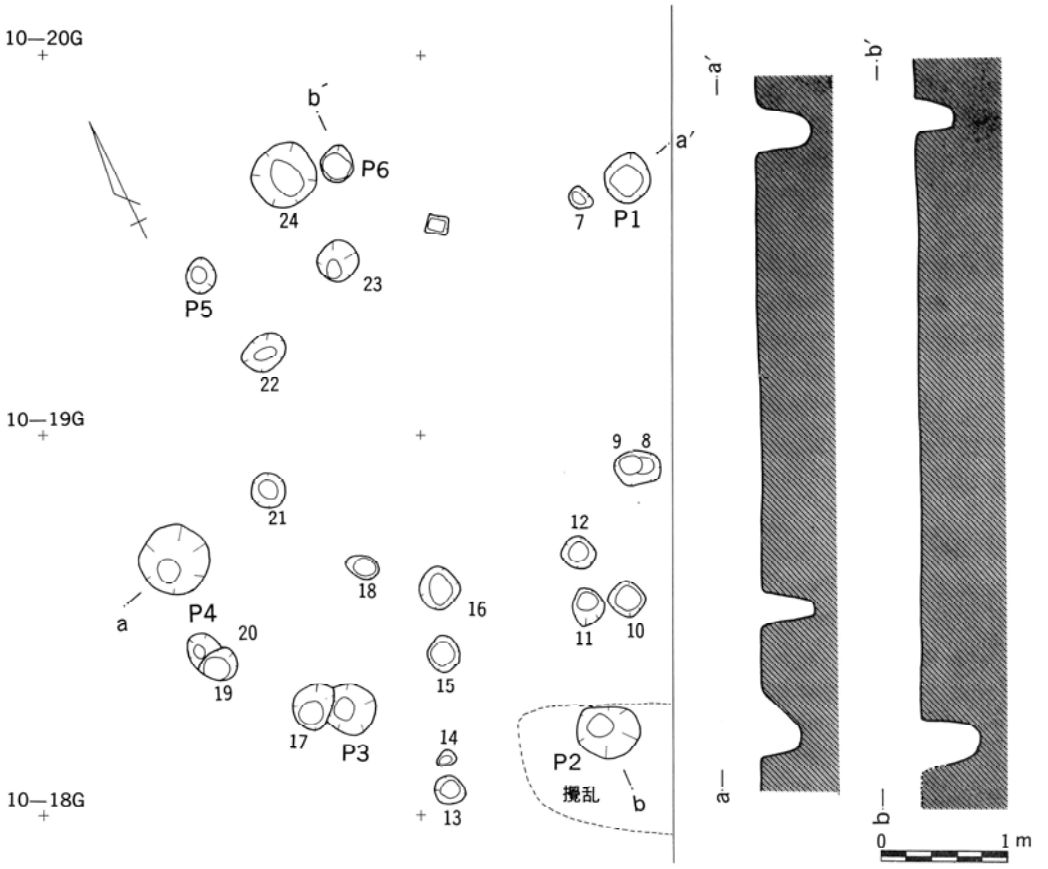
第９図　第６号住居跡

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
深さ (cm)	21	32	33	26	30	61	55	19	33	9	25	10	16	16	13	17	15	26	52	16	15	20	28	15	43	25

（壁・周溝・床面・炉跡）検出されない。

（柱穴）暗褐色微砂と黄褐色地山小ブロックを覆土とするＰ１～７が主体となる。全体では26個の柱穴が認められた。Ｐ５と重複する土壙は近現代の所産である。

（遺物の出土状況）柱穴からの出土はない。10—16グリッド包含層よりフレイク２点、９—18グリッドより土器片２・フレイク４点が出土したに留まる。縄文後期末の所産である。



第10図　第７号住居跡

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
深さ(cm)	41	41	33	29	39	28	29	14	24	21	17	16	12	11	14	22	22	17	28	10	36	25	28

７号住居跡　（第10図・図版９）

（遺構の確認）10～11—19～20グリッドに位置する。検出面はⅣ層上面。

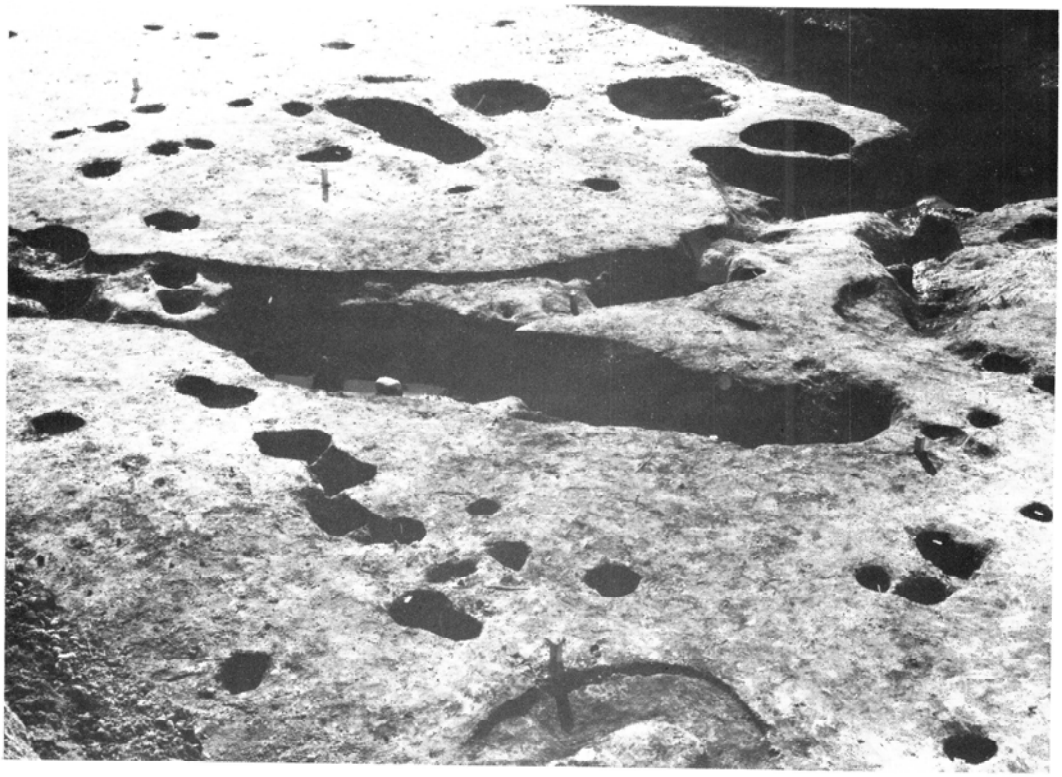
（平面形）ほぼ円形を呈すると考えられる。東側約¼が調査区の関係で未検出である。推定径約５～5.5mを計る。

（壁・周溝・床面・炉跡）検出されない。調査区東壁セクションで壁の立上がり及び床面の観察を行なったが検出されなかった。

（柱穴）暗褐色粘質微砂と若干の黄褐色地山小ブロックを含む覆土をもつピットが主体となる。Ｐ１～６がこれにあたる。全体では24箇の柱穴が認められた。

（遺物の出土状況）Ｐ４から土器・フレイク各１点出土。縄文時代後期末に比定される。

図版 9



ST4・ST5・ST75 完掘状況(NE↑)

ST6・ST7 完掘状況(N↑)

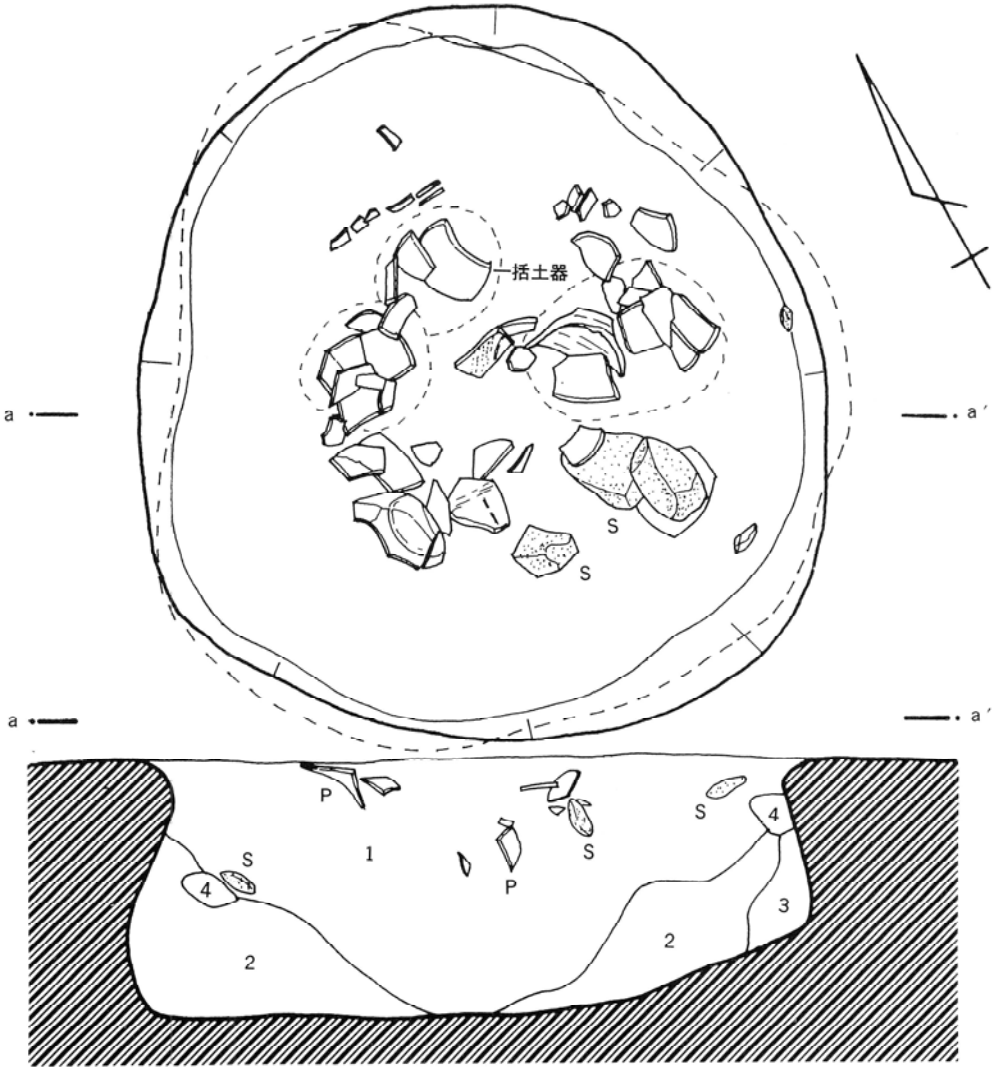
（2）土　壙

2号土壙　（第11図・図版10）

C地区南端部10―4グリッドに位置し、検出面はIII層下位である。遺存状態は良好である。平面形は不整円形を呈し、長径100cm・短径90cm・最深部35cmを計る。壁は袋状に掘り込まれており、壙底は平担であるが東側が若干浅くなっている。

土層の堆積状態は、黒褐色粘質微砂を中心として緩やかな堆積を示し、壁際に一部崩壊土及び黄褐色地山のブロックの混入がみられる。

遺物は覆土第1層より集中的に出土しており、フレイク・チップ・礫（磨石等の残欠）

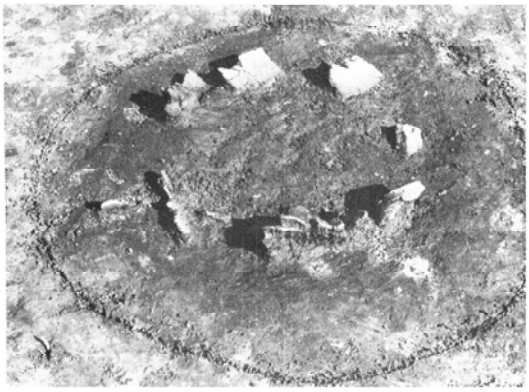


1　黒褐色粘質微砂（大量の土器片を含む）
2　　〃　　（やや粘性が強く、遺物は少ない）
3　暗黄褐色微砂（崩壊土）
4　地山小ブロック　　S　礫　　P　土器片

0　50cm

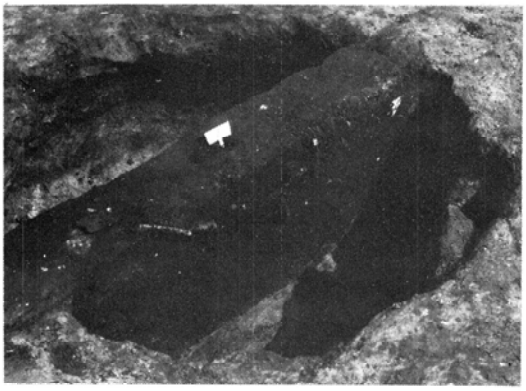
第11図　2号土壙

図版10

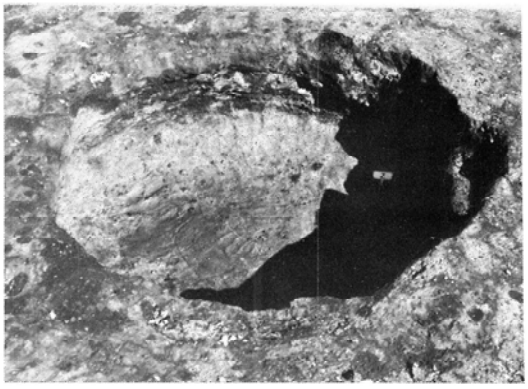


SK2 プラン検出状況

同　遺物出土状況



同　セクション



同　完掘状況

SK2 出土主要遺物

33点である。出土の状態は、土壙中央部50〜60cmを中心に投棄されたと考えられる状況である。土器は、底部片・口縁部片・体部片の比較的小形の破片が多い。時期的には縄文時代後期末葉に比定され、一括資料であるため、この時期の土器様相を知る上で小破片ではあるが好資料となる。

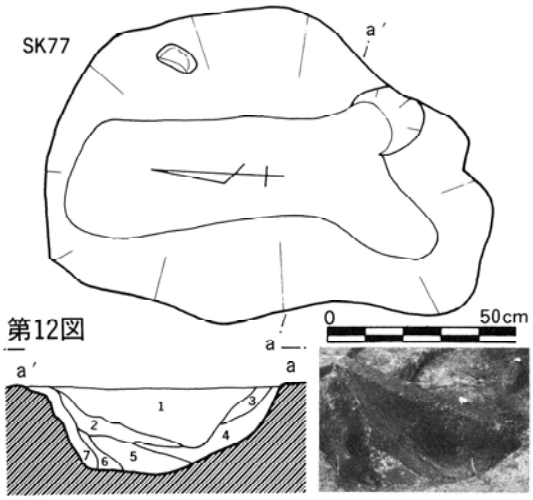
土壙自体の性格は、袋状を呈すること、覆土の状態などにより貯蔵用施設と考えられる。貯蔵用としての機能を失った後、土器その他が投棄されたものであろう。

77号土壙　（第12図・図版11・12）

10—14〜15グリッドに位置する。西側約½がＳＤ75、北側約⅓がＳＫ79と重複する。プランは、ＳＤ75を一部掘り下げた段階で確認された。平面形は不整楕円形を呈し、長径230cm・短径160cm・深さ45cmを計る。長軸方向はほぼ磁北と一致する。壁は北側でやや急だが他は比較的ゆるやかに掘り込まれており、南東部で４号住居跡の柱穴と重複する。壙底は平担である。土層の堆積状態は、１層が厚く堆積し、大量の遺物を含んでいる。ＳＫ77からは86点の土器片が出土しているが、そのほとんどはこの層よりの出土である。縄文時代後期末の所産である。

中世〜近世の土壙（ＳＫ61〜64・98〜100）

径100cm前後・深さ20〜30cmの円形の土壙で覆土に多量の黄褐色地山をブロック状に含む皿状を呈するものである。Ｃ地区南側７〜９—６〜８グリッド、Ｃ地区中央部の７〜８—12〜13グリッド内に偏在する。こ

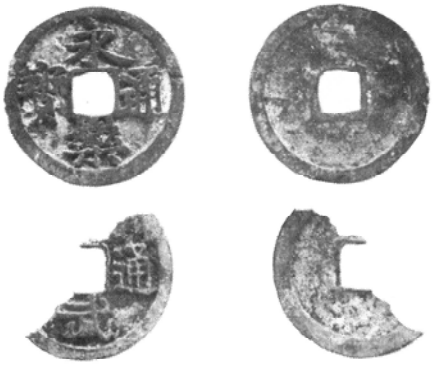


第12図

ＳＫ77土層セクション
1　黒褐色微砂（大量の遺物を含む）
2　黒褐色粘質微砂（若干風化礫を含む）
3　黒褐色微砂（１に比し、やや砂質）
4　暗褐色微砂（砂質っぽい）
5　黒褐色微砂（均質は堆積を示す）
6　〃　（地山シルトを少々混入する）
7　〃　（崩壊土）

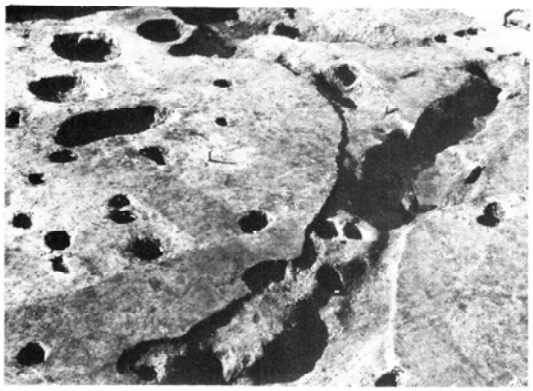
図版11　ＳＫ77セクション

図版12　ＳＫ77出土遺物



図版13　ＳＫ62出土遺物

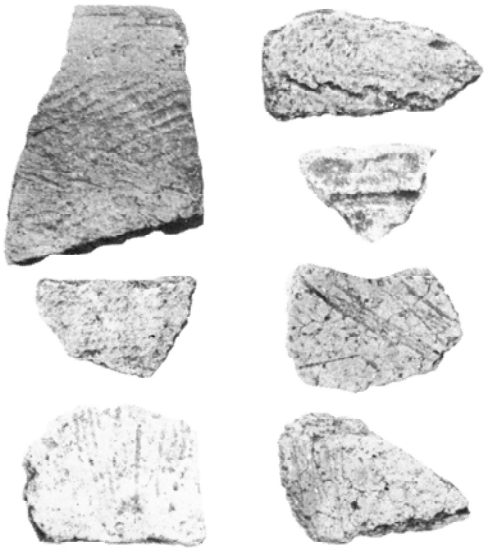
図版14



SD75

SD75 セクション

SD75 セクション



SD75 出土遺物

れらの土壙からの遺物の出土は少ない。(表2参照) S K62からは永楽通宝・洪武通宝各1点出土している。室町時代に属する古銭ではあるが、(図版13)土壙自体、近世以後の所産の可能性もあり、これら遺物は後世の攪乱により土壙内に混入したことも考えられる。

(3) 溝　跡

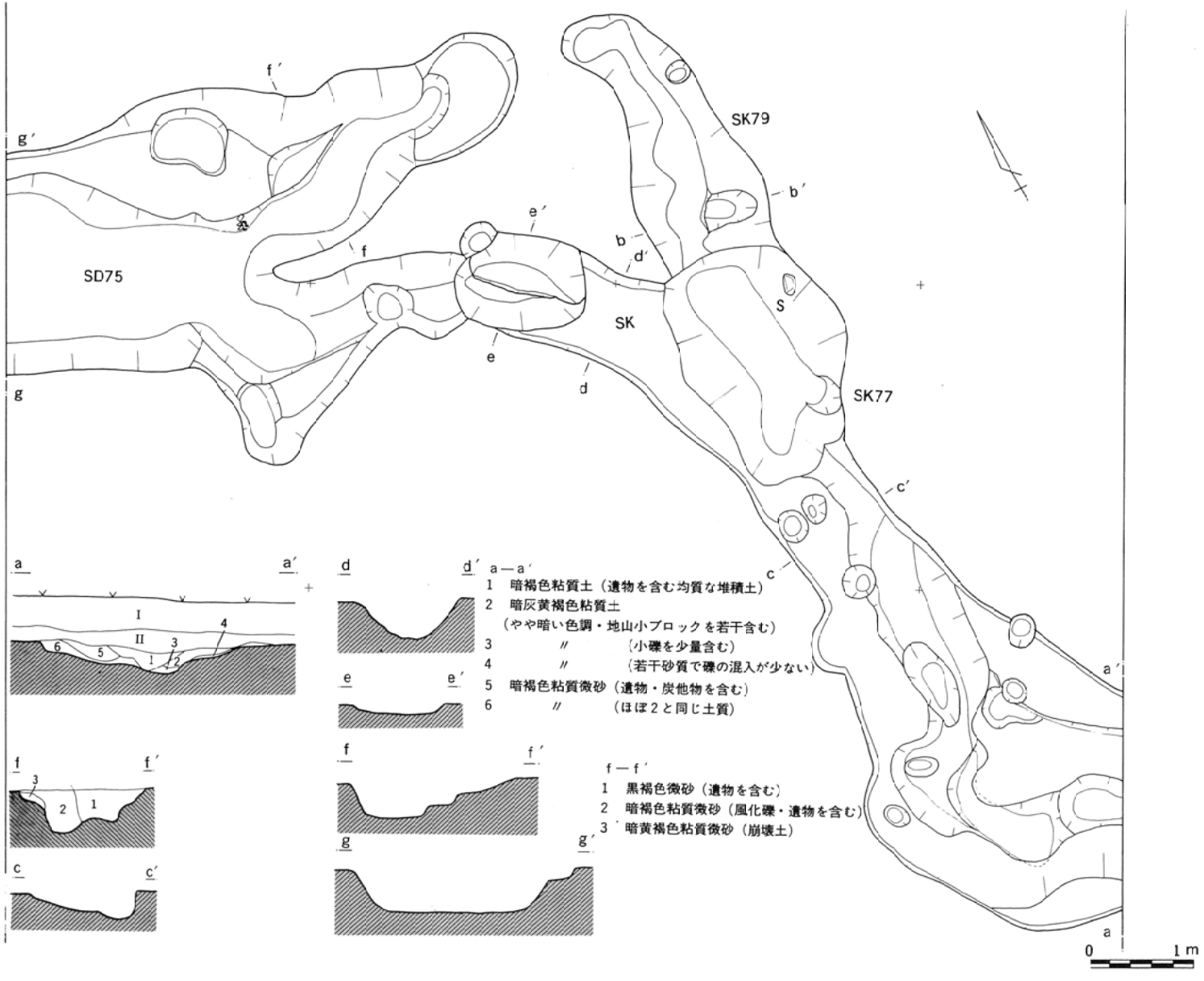
75号溝跡　(第13図・図版14)

C地区中央部7～10—12～15グリッドに位置する。検出面はII層下位～IV層上面で、溝底はIV層中まで達している。南東から曲線的に弧を描いて西へ走っている。

溝幅は1～3m程で、深さは20～50cmを計る。溝底は不規則な凸凹である。S K77・79・200と重複し、さらに4号・5号住居跡の柱穴もこの溝と重複しているものと考えられる。遺物は、S D75覆土中より土器片156・石器(フレイク・チップ)5点が出土している。特にS K77との切り合い関係はセクション及び出土土器の検討によりS D75→S K77の新旧関係が認められる。本遺構の時期は縄文後期末葉と考えられる。性格については現時点では不明である。

74号溝跡　(第6図)

7～11—10グリッドに位置し、検出面はIII層下位である。幅50cm～100cm、深さ20～30cmを計る。覆土の状態により時期は近代の所産と考えられる。フレイク・チップが15点、トゥールが4点(R Q 4・5・6・7)出土しているが、これは攪乱による混入であろう。S D73・89も同様な遺構である。



第13図　75号溝跡・79号土壙

2　遺物

（a）土器

本遺跡出土土器は総数746点で、その大半は遺構内覆土より出土したものである。(表―2・表―3参照)全体に破片が小さく器形等判然とするものはない。以下施文文様から類別し、説明を附す。

第1類　沈線区画による縄文帯（入組文）およびそのモチーフの内部・接部等に瘤を配するもので、瘤の形態に特徴を有す。瘤は、単独で貼付され、径5㎜内外の円形を呈す。縄文帯の外は磨消帯をなす。(第16図1・4～10・13？・22？・25・26？・28？)

第2類　沈線による弧線文が主要なモチーフをなし、その内部・接部・口縁部等に第1類と同様の瘤を貼付する。(第16図2・3・12・27・30・38・41)

第3類　沈線区画による帯状帯（入組文）の内部にクシ歯状の工具で沈線文を充塡する。区画外は磨消帯となる。(第15図28・第16図11)　2点のみの出土である。

第4類　クシ歯状の工具で器面に細かな沈線文を施す粗製土器である。工具の幅は約1.4㎝で10～11条の沈線が1単位をなしている。(第15図1～23)　図示した資料はＳＫ2内出土の一括土器で、同一個体と考えられる。

第5類　やや太い一本沈線による格子目状文を施す土器で、口縁のやや肥厚する深鉢形土器と考えられる。(第15図24・25)

第6類　目の粗いクシ歯状工具で2～4条の平行沈線を1単位として施す粗製土器である。(第15図26・27・第16図31)

第7類　撚糸地文の粗製土器を一括する。

(第15図36・38・39・第16図14～16・19～21・23・24・32・34・37・40・42～44)　(図版15下段)

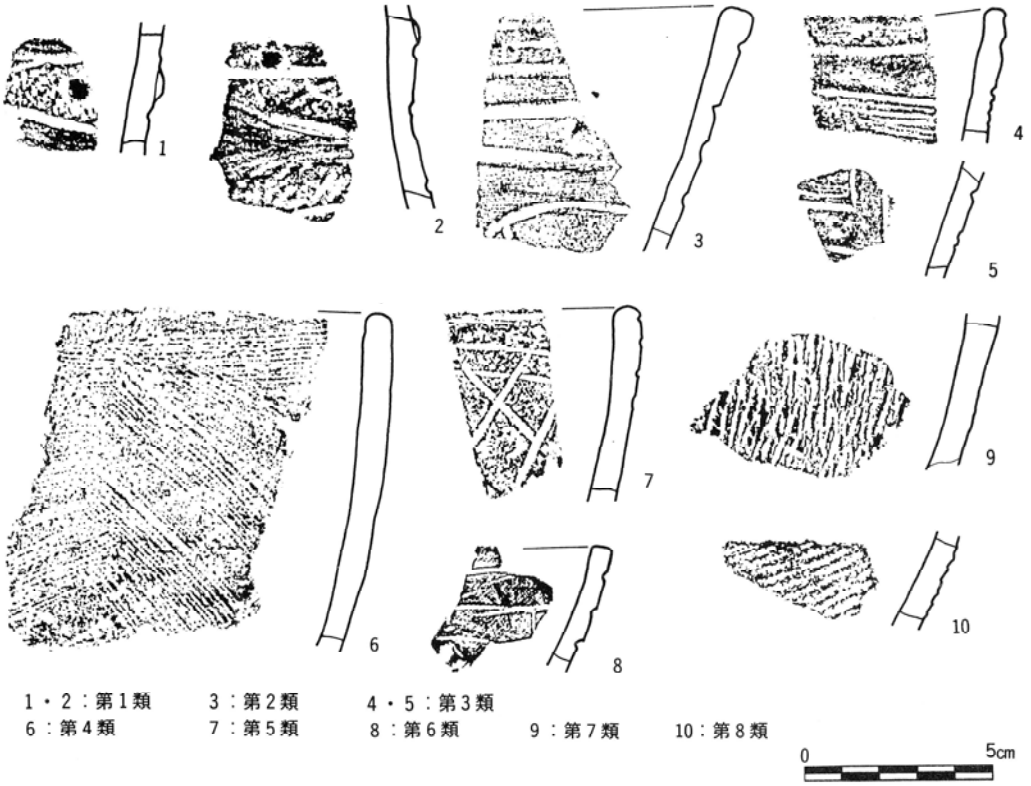
第8類　縄文地文の粗製土器を一括する。

(第15図30・31・33・35～37・40・第16図29・33～35・45)

口縁に粗い一条の沈線を巡らすもの（第15図30・31）や、横走する綾繰文の施されるもの（第16図17・18）等がある。

以上第1類～第8類が本遺跡における縄文時代後期末葉の土器群の類別である。全体に破片が小さいため施文文様のモチーフ等明確に把握できないことからその類別が困難なものがある。特に第1類としたものの中には、幅広の帯縄文を有すものがあり、瘤の貼付が破片中に認められない一群（第16図13・22・26・28）等は別類として区別した方がより妥当かもしれない。次に、これら土器群の遺構内での在り方を検討してみよう。

最もまとまって土器の出土しているＳＫ2では、第4類を中心に第1～第8類までの全



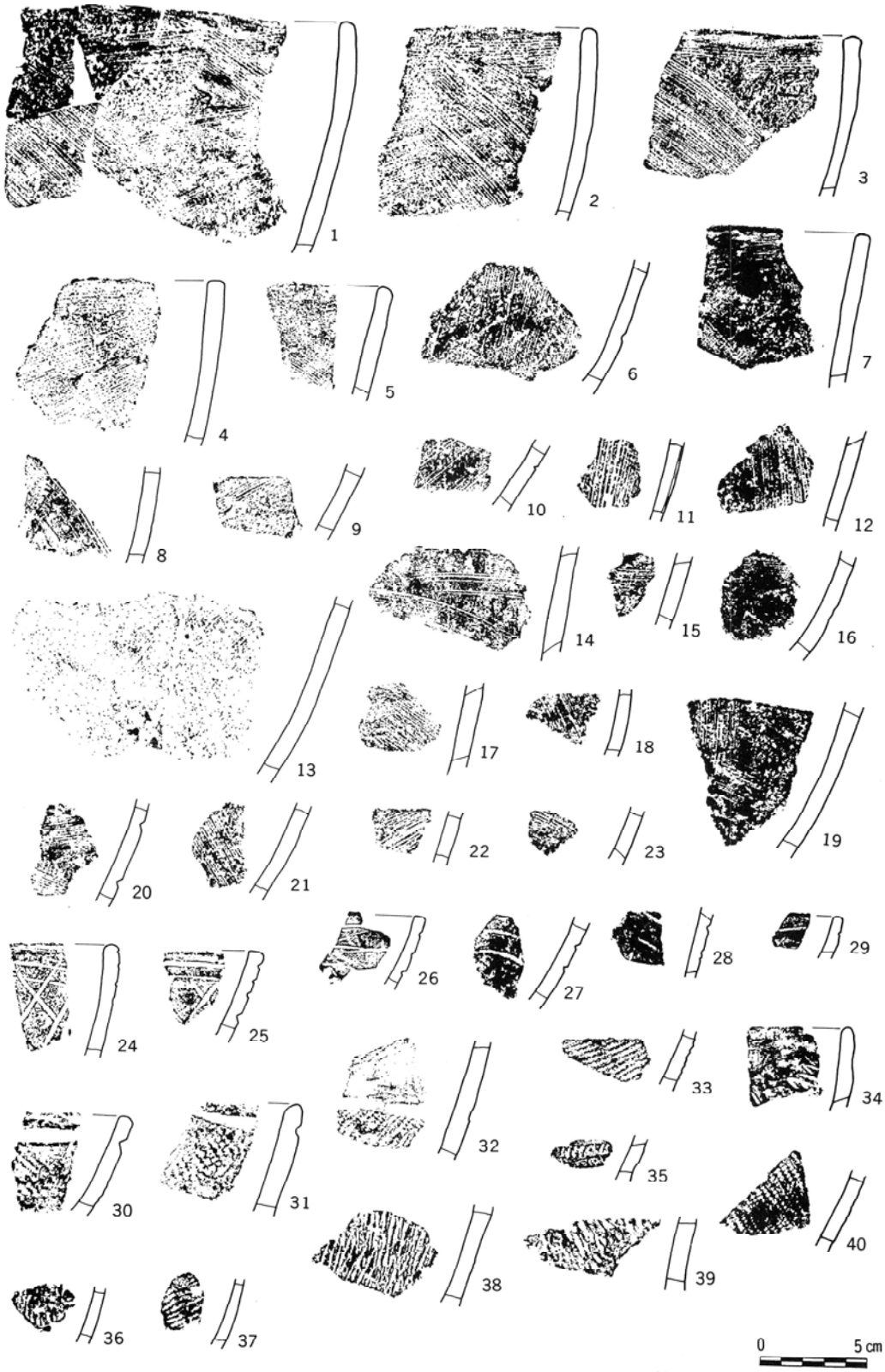
第14図　土器分類概念図

ての土器群が出土している。ＳＤ75では、第１類・第７類・第８類が共伴し、ＳＫ77では、第１類・第２類・第７類・第８類が共伴している。

Ｃ地区内には、これらの土器群の他、他型式の土器群が全く混在せず、単期間における土器群のあり方がうかがえる。

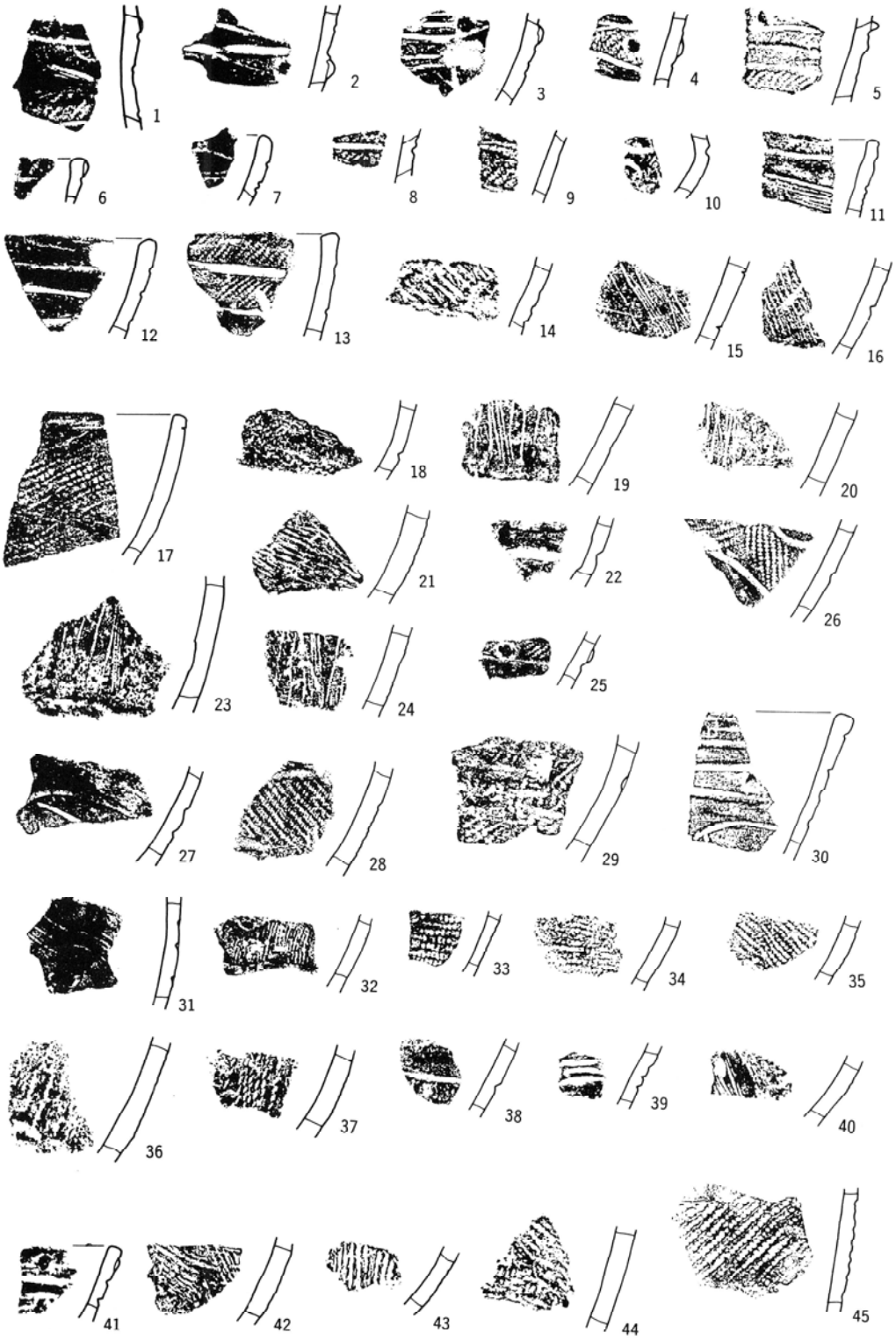
土器の編年的位置付け

うぐいす沢遺跡における第１～第８類土器は、その施文文様などの特徴からコブ付土器様式として把握できるものである。とりわけ体部上半から口縁部にかけての文様帯（IIa帯）を持つ土器群（註９）（第１類～第３類）は、瘤の形態や位置、入組文ないし弧線文・充塡クシ歯状文などのあり方からその初期のものである事を予想させる。安孫子（1969）の編年に照らせば、その第Ｉ段階～第II段階に相当しよう。特に第３類のクシ歯状文は（註９）『第Ｉ段階のＡＩ型式ｂ類に限ってこの櫛歯手法が取り入れられる』としており、第II段階では消滅するとの事からその編年的および型式（タイプ）的位置が特定される。第１類および第２類については、全体的なモチーフや器形の判別できるものがない事から確かな事が言えないが、瘤の貼付やその形態等を考慮して、第II段階に相当するものと考えられる。粗製土器の第４～第８類についても第１～第３類との共伴から略同一時期として大過ないと考える。



第15図　土器拓影（1）

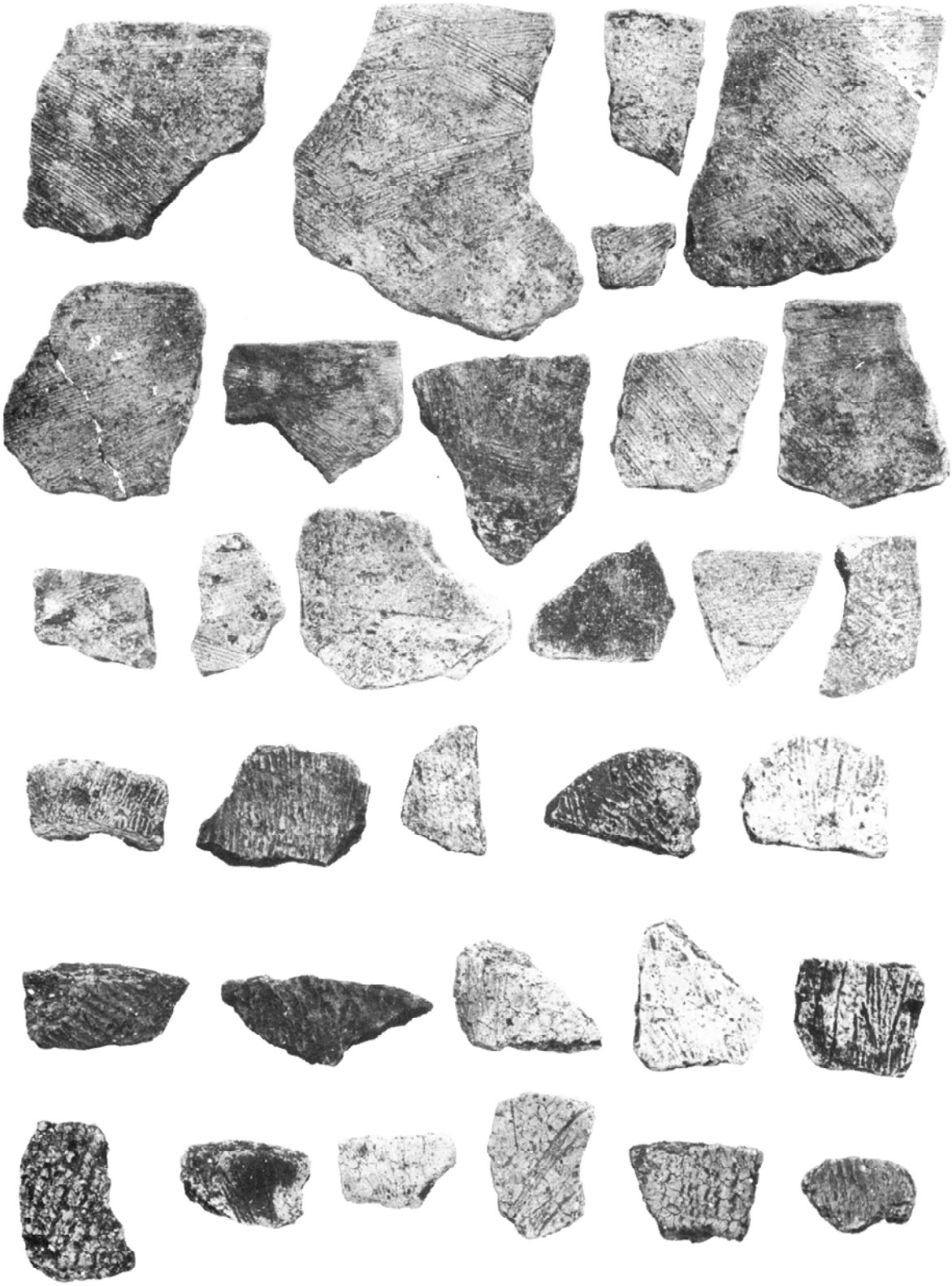
1～39：SK2



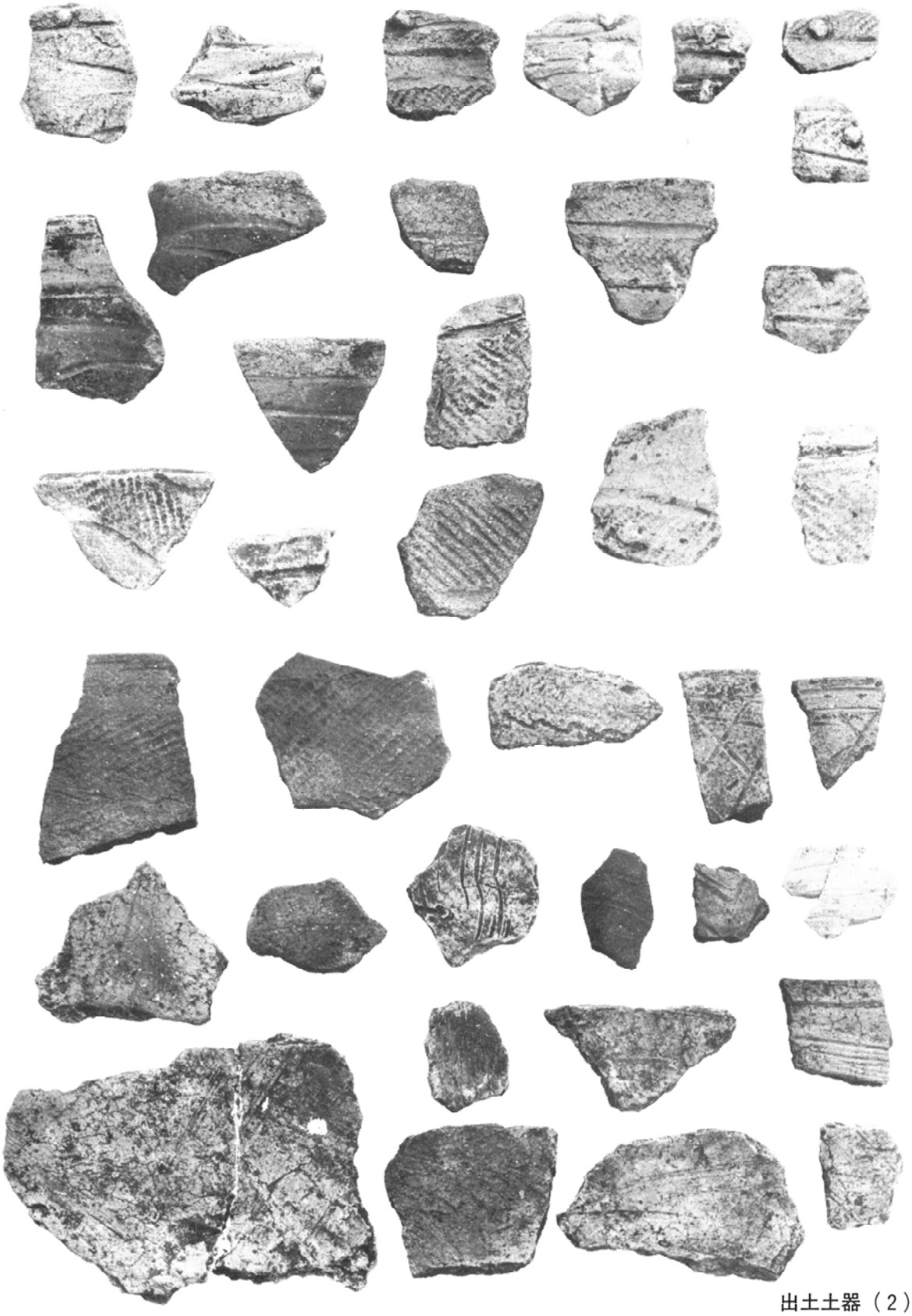
1～11・13：SK2　14：SK67F　15～24：SD75　12・25～33：SK78　34：SD101　35：SD1　36・37：ST1　38：ST2・EP64　39：ST2・EP64　40：ST4・EP4　41～45：包含層

0　5 cm

第16図　土器拓影（2）



出土土器（1）



出土土器（2）

（b）石器

本遺跡における石器の出土点数は、砕片・剥片を含めて総数527点である。その内、主要なものについては表―4に示す通りで、打製石器・礫石器・石核等39点がある。打製石器では、石鏃・石錐・打製石斧・掻削器・使用痕ある剥片等の器種があり、礫石器では磨石一種に限られている。これらの器種別点数および割合は、石鏃1(2.56%)、石錐1(2.56%)、打製石斧6(15.38%)、掻削器23(58.97%)、使用痕ある剥片1(2.56%)、磨石3(7.69%)、石核5(12.82%)となる。なお砕・剥片の点数は488点であり、割合については石核までの39点を基準とした。以下では、器種毎にその形態・技術的な特徴について説明を付す。

石鏃（図版17―1）

全長3.4cm、最大幅2.4cm、最大厚0.7cmを計る。全体に丸味が強い。基部・尖頭部とも同様な突出を見せる。主剥離面の左縁中程にバルブの高まりを残し、加工は基部・尖頭部を中心に表裏の側縁に集中している。素材の中央に至る加工はない。材質は頁岩である。

石錐（図版17―2）

全長4.3cmを計り、逆三角形状を呈する。加工は、表面(2a)の尖頭部に至る両側縁を中心に行われ、裏面(2b)では粗である。尖頭部の断面形は、菱形を呈す。頁岩素材である。

打製石斧（図版17―3～8）

形態からa～cの三種に細別できる。

a：基部の調整を行い刃部と明瞭に区別できるもので（3・8）、表面（3a・8a）刃部に自然面を残す。加工はいずれも表・裏面の側縁(基部部分)に集中して加えられる。裏面には主剥離面が大方残り、刃部の表裏先端部分に使用痕によると考えられる光沢を認める。

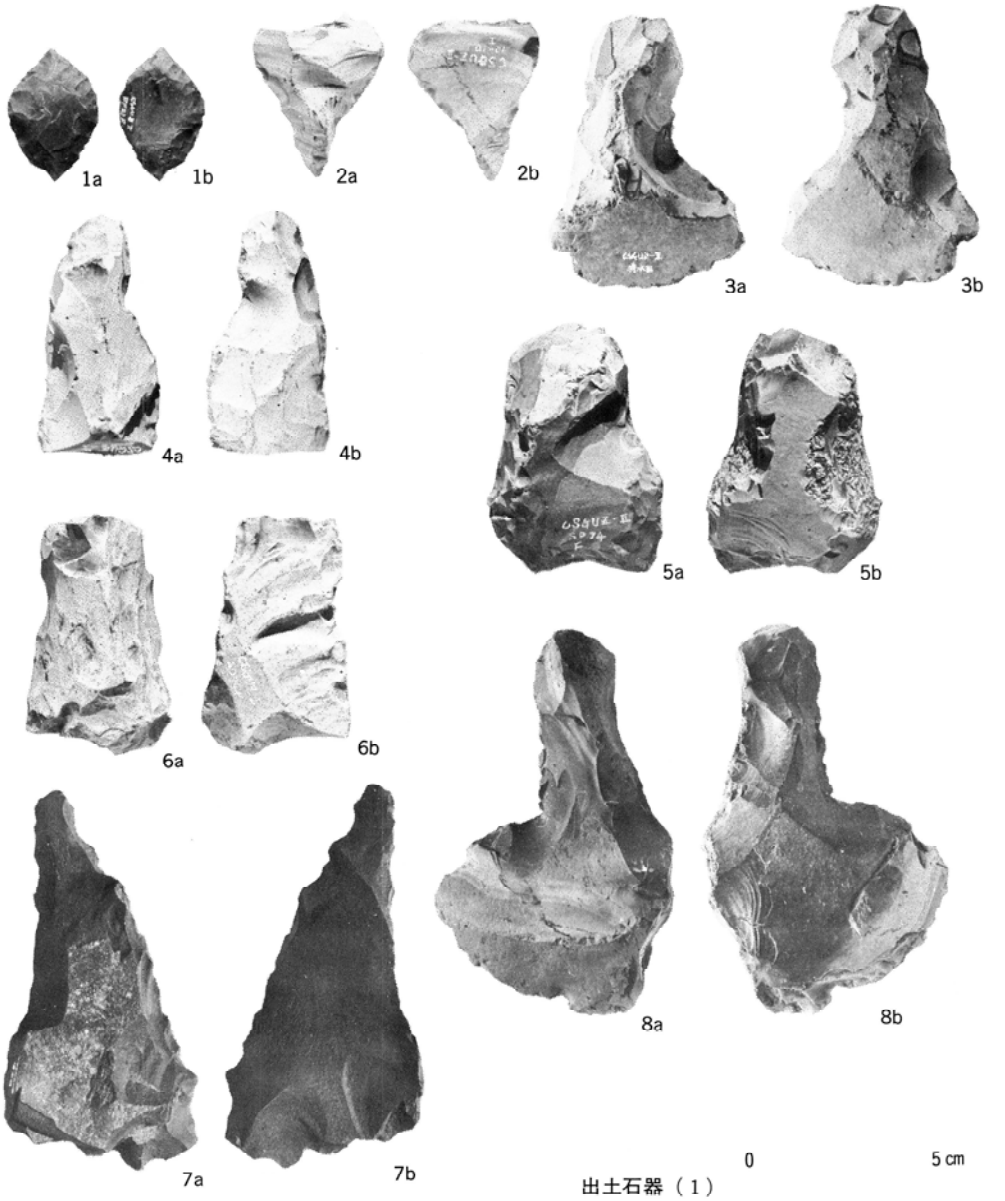
b：所謂分銅形を呈し、器厚が2.2cm（6）、3.3cm（7）と厚い。加工は側縁に集中的に認められ、一部刃部表裏にも及ぶ。裏面には主剥離面が残り、5の両側縁には連続的な打圧による調整痕が認められる。いずれも頁岩を素材としている。

c：打点・バルブ等を残す未製品と考えられるものである。加工は、表面の両側縁および刃部、裏面の刃部・基部に粗く施されるのみであり、基部等の作出は認めない。(7)

掻・削器・使用痕ある剥片（図版18―19～31）

不定形な剥片の1側縁ないし2側縁に二次加工を加えるもので、掻器ないし削器としての機能が考えられる。これらの中には、剥片の先端を掻器状に整形するもの(31)や、ノッチ状の刃部を持つもの（25）等がある。いずれも頁岩を素材としている。

磨石（図版19―1～3）　いずれも楕円形を呈し、表裏面ともに磨痕が認められる。花崗岩を素材とするもの（1・2）、安山岩を素材とする（3）がある。

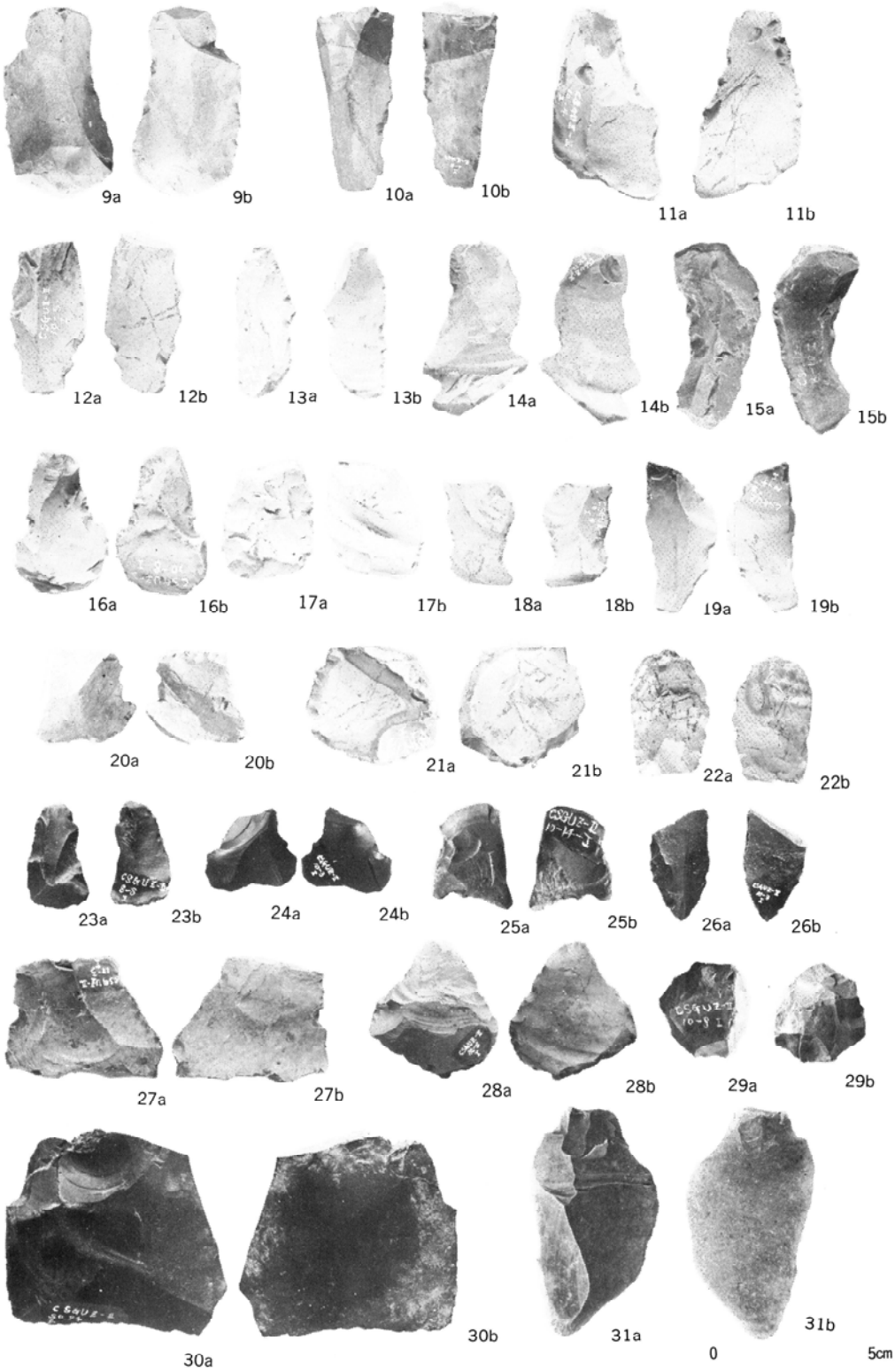


出土石器（1）

遺物番号	出土地点	種別他	図版番号	遺物番号	出土地点	種別他	図版番号	遺物番号	出土地点	種別他	図版番号	遺物番号	出土地点	種別他	図版番号
1	7-25 I	磨石	19-33	11	11-10 II	石核	—	21	11～12 I -3～4	掻・削器	18-9	31	10-4 I	掻・削器	18-11
2	11～12 I -4～3	磨石	19-32	12	10-3 I	掻・削器	18-26	22	10-14 I	掻・削器	18-25	32	10-10 I	石錐	17-2
3	10-10 I	磨石	19-34	13	8-10 I	掻・削器	18-15	23	10-3 I	掻・削器	18-24	33	10-6 I	掻・削器	18-22
4	SD74F	打製石斧	17-6	14	10-5 I	掻・削器	18-12	24	8-14 I	石核	—	34	8-35 I	打製石斧基部	17-4
5	SD74F	使用痕ある剥片	18-30	15	8-8 I	掻・削器	18-13	25	8-8 I	掻・削器	18-23	35	10-5 I	打製石斧	17-8
6	SD74F	打製石斧	17-5	16	10-8 I	掻・削器	18-16	26	10-4 I	掻・削器	18-17	36	SK62F	洪武通宝	13
7	SD74F	掻・削器	—	17	10-4 I	掻・削器	18-19	27	12-6 I	掻・削器	18-28	37	SK62F	永楽通宝	13
8	SK22F	掻・削器	18-14	18	12-7 I	掻・削器	18-21	28	10-8 I	石核？	18-29	38	X-O	打製石斧	17-3
9	ST3 EP19	石鏃	17-1	19	10-3 I	掻・削器	18-27	29	10-4 I	掻・削器	18-18	39	X-O	打製石斧	17-7
10	11-10 II	石核	—	20	12-7 I	掻・削器	18-20	30	11-7 I	掻・削器	18-10	40	B地区 X-O	掻・削器	—
												41	X-O	掻・削器	18-41

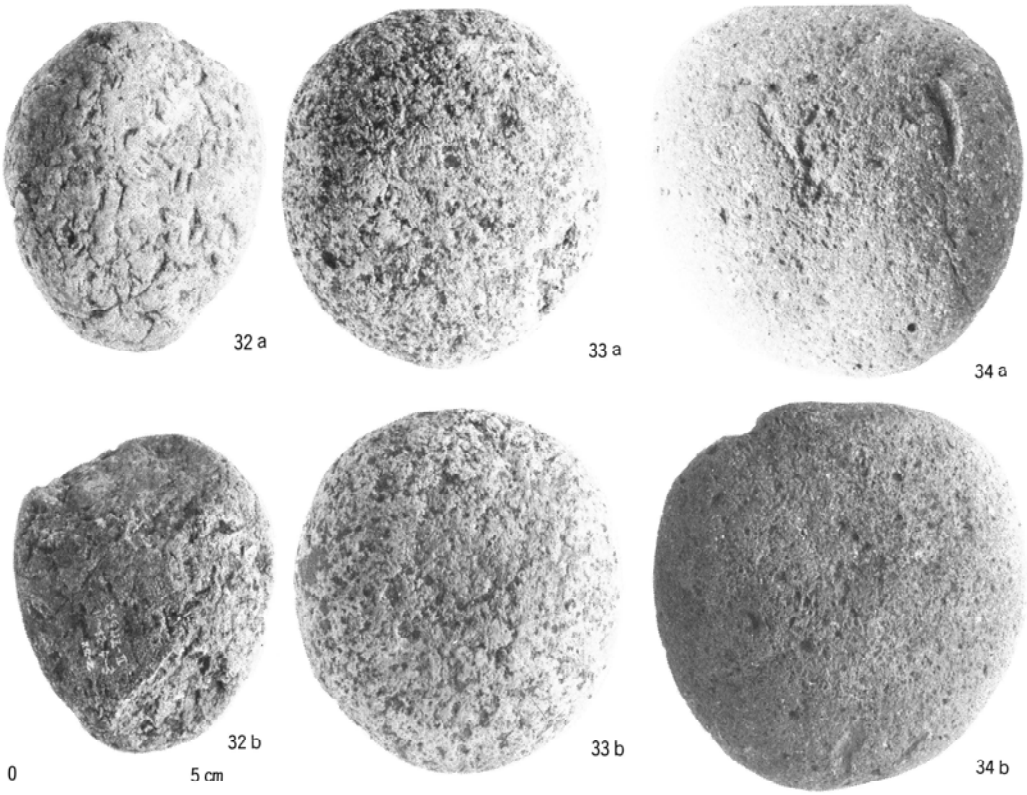
表－4　うぐいす沢遺跡出土石器他一覧

図版18


9a
9b
10a
10b
11a
11b
12a
12b
13a
13b
14a
14b
15a
15b
16a
16b
17a
17b
18a
18b
19a
19b
20a
20b
21a
21b
22a
22b
23a
23b
24a
24b
25a
25b
26a
26b
27a
27b
28a
28b
29a
29b
30a
30b
31a
31b
0
5cm

出土石器（2）

図版19



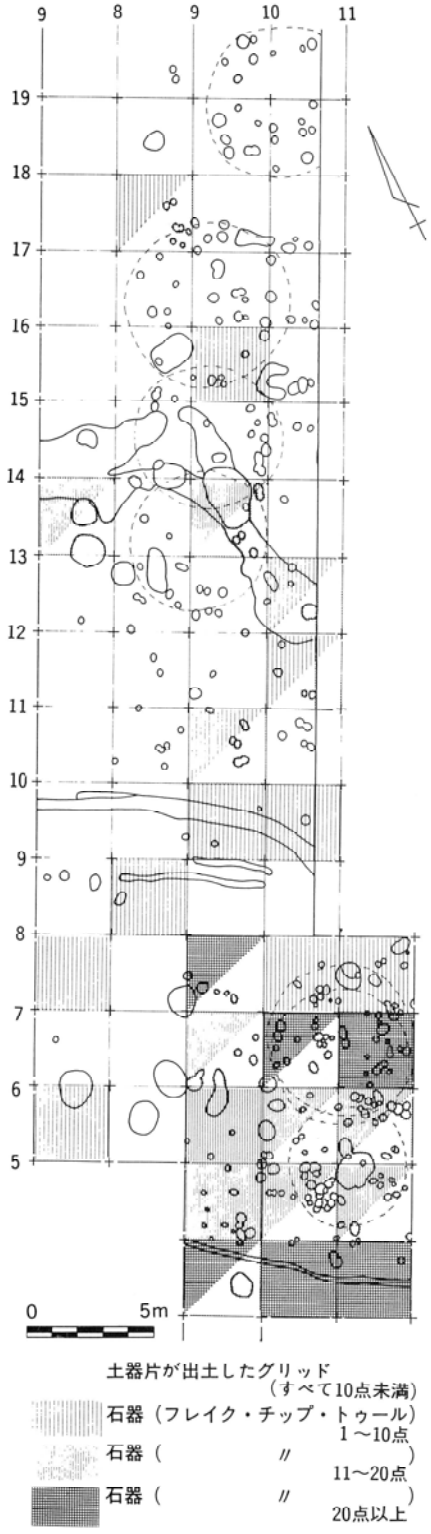
出土石器（３）

Ⅳ　まとめ

うぐいす沢遺跡は、村山平野南西部、最上川右岸の河岸段丘上に立地する遺跡である。２次に亘る調査の結果、縄文時代中期中葉から末葉、後期後葉の３つの時期に営まれた遺跡であることが明らかになった。

今次調査では、遺跡西側について緊急発掘調査をおこなったが、当該地区では、検出された遺構・出土した遺物のほとんどが縄文時代後期末葉に位置づけられるものであった。わずかに、Ｃ地区南半部に中世～近世の所産と考えられる土壙が散在し、また、Ｂ地区から「赤焼土器」の小型の甕（口縁部片・図版20）及びＣ地区より須恵器坏（底部片・図版20）が出土している。これら、平安時代～近世にかけての遺構・遺物は量的には極めて少なく、また２次に亘る調査の範囲では遺構と遺物を結びつける手がかりは摑み得ていない状況である。うぐいす沢遺跡の立地する段丘上に、平安～中世・近世に

図版20　赤焼土器・須恵器



第17図　（C地区包含層出土　概念図）

かけての遺跡が存在する可能性がわずかではあるが残っている。

（1）遺構について

住居跡は7棟確認されたが、いづれも壁・炉跡・周溝は検出されなかった。また、住居跡の配置はC地区に集中し、特に湧水地点に近い南側に多数のピット群が所在する特色をもつ。最上川に面する北側の段丘縁辺部には、過去に削平あるいは攪乱されているため、縄文時代以降の遺構は一部土壙の壙底部分、柱穴の一部がわずかに認められたに過ぎない。

山形県内では、現在までに（1982年2月）発見・報告されている縄文時代後期、特に後葉から末葉にかけての住居跡の例は極めて少ない。範囲を後・晩期に広げても30数例に留まる。現段階でこれらの類例を集成したものが表―5である。尚、町下遺跡（飯豊町）は現在、県教委による報告書作成途中(註10)であり、また砂川A遺跡（朝日村）及び石ケ森遺跡（高畠町）についても、当該町村により報告書作成中(註11)であるため詳細は不明な点が多い。ここでは、現段階で判明している類例をあげ、うぐいす沢遺跡の住居跡の性格について考えてみたい。

表―5に記載したように、県内の縄文時代後期後葉～末葉にかけての住居跡例は、作野2号住居跡、砂川A3号住居跡、石ケ森10棟の住居跡、町下1～6号の8棟の住居跡、さらに神失田1号住居跡があげられるに過ぎない。このうち、時期的に後期後葉から末葉が主体となるのは、町下遺跡、石ケ森遺跡の2遺跡である。砂川A遺跡は晩期大洞B、B―C式期との複合遺跡、作野遺跡についても、後期末、コブ付土器第II群から晩期大洞A′までに亘り、主体は大洞B～C_2(註12)におかれる。また、

作野遺跡２号住居跡は、小竪穴遺構であり、時期的にはコブ付土器第Ⅲ段階～大洞Ｂ式の所産としているが、明確に住居跡であるかについては若干の疑問が残る。神矢田遺跡１号住居跡は、平地式住居で中央に石組炉が位置している。炉跡及び住居跡床面出土の土器により後期末葉の所産と報告されている。神矢田遺跡は第１次～第５次の発掘調査で３棟の住居跡が検出されているが、上記１号住居跡の他は晩期の所産である。また、高畠町上平柳遺跡も後期から晩期に亘る遺跡である。

以上が県内の縄文時代後期後葉～末葉にかけての住居跡である。時期的に、うぐいす沢遺跡第２次調査により検出された遺構群と比較的近く、また一時期に集中的に営まれたと考えられる遺跡は、上述の通り、町下遺跡・石ケ森遺跡の２遺跡である。うぐいす沢遺跡１～７号住居跡は、壁を有しない点、町下遺跡、神矢田遺跡の各住居跡に近い形態である。また、町下遺跡では８棟の住居跡のうち２棟について地床炉が認められている。神矢田１号住居跡の第１号炉跡は石組炉である。ひとつの集落を考えた場合、町下・石ケ森の両遺跡は、単一遺跡としてこの時期の集落を考察するに好資料となるが、集落全体の在り方（例えば土壙、墓域など）については不明な点が多い。うぐいす沢遺跡もまた同様である。

うぐいす沢遺跡は、他の同時期または近い時期の遺跡に比して出土遺物の数が極端に少ない点も特徴である。また、遺構については、後期末の所産としては、住居跡の他、土壙４基、溝跡１基であり、集落を構成する各種遺構群は検出されていない。調査区域の関係もあろうが、類例としてあげた他遺跡と比較した場合、遺物の出土状況と同様、遺構は少ない。以上により、今次調査区域の遺構群は、集落としての機能を有するに不充分な質、または量であり、本遺跡の性格としては、いわゆる「本村」ではなく、キャンプサイトと考えた方が妥当であろう。この時期の住居跡の型態については、類例が少なくまだ不明な点が多い。今後の類例を持ち、さらに検討を加える必要があろう。

（２）遺物について

遺物では、縄文後期末葉の土器・石器を中心に、赤焼き土器（甕）・須恵器（高台付坏）の破片・古銭（洪武通宝１・永楽通宝１）が出土した。その他近世～近代にかけての陶磁片若干がある。土器については、前章の２遺物の項で述べたので割合する。類例については、高畠町石が森遺跡(註５)、上山市沼田遺跡(註５)、山形市大森遺跡(註５)、村山市作野遺跡(註12)、遊佐町神矢田遺跡等がある。石器では、打製石器・礫石器他39点があり、剥片等を含めた総数527点を数える(註13)。量的には全体に僅少と言える。器種的には掻・削器23点（約59％）、打製石斧６点（約15％）で石器の約７割以上を占めるあり方や、石鏃・石錐の各１点といった希少性および石匙等他の欠落が認められた。これは、単に限定された調査区城と云う問題からの帰結だけではなく、遺跡の本来的な性格によると考えるのが妥当と思われる。

表－5　山形県　縄文時代　後・晩期住居跡の発見例

	遺跡・住居跡名	平面形	種別	長径×短径(m)	周溝	柱穴(主柱穴)	壁高(cm)	炉跡	時期
1	神矢田1号　(遊佐町)	円形(?)	平地(?)	6～7m	無	17	?	石組炉　(中央)	後期末葉
2	作野2号　(村山市)	不整楕円形	竪穴	3×2.6	無	2	20cm	石囲炉　(外部)	後期末葉
3	砂川A3号　(朝日村)	不明	竪穴	不明	不明	不明	不明	未詳	後期末葉
4	町下1号　(飯豊町)	楕円形	平地(?)	6.8×5.2	有	21	無	無	後期末葉
5	〃　2号　(〃)	楕円形	平地(?)	6.4×6.0	有	24(?)	無	無	後期末葉
6	〃　3号　(〃)	楕円形	平地(?)	6.6×6.4	有	30(?)	無	地床炉(南寄り)	後期末葉
7	〃　4a号　(〃)	不整楕円形(?)	竪穴	6.4×6.0	有	30(?)	5	無	後期末葉
8	〃　4b号　(〃)	楕円形	竪穴	3.6×3.2	無	14(?)	5	地床炉　(中央)	後期末葉
9	〃　5a号　(〃)	円形(?)	平地(?)	6.4	有	25(?)	無	無	後期末葉
10	〃　5b号　(〃)	円形	平地(?)	6.8	無	20(?)	無	無	後期末葉
11	〃　6号　(〃)	楕円形	平地(?)	7.2×6.4(?)	有	20(?)	無	無	後期末葉
12	石ヶ森1～10号(高畠町)	円形又は隅丸方形	竪穴	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	後期末葉
13	砂川A9～10号(朝日村)	末詳	竪穴	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	後期
14	上平柳1号　(高畠町)	楕円形	竪穴	5.0×3.6	無	5(?)	未詳	未詳	後期
15	的場1号　(西川町)	楕円形	竪穴	8.5×4.4(?)	有	7	15	?	大洞A～A′
16	〃　3号　(〃)	円形	竪穴	10.2×9.4	有	20(6)	20	石囲炉　(中央)	大洞C_2
17	〃　4号　(〃)	円形	竪穴	6.9×6.9	有	3	4	?	大洞C_2
18	玉川C1号　(羽黒町)	不整円形	竪穴(?)	5.0×4.5(?)	無	9	?	石組炉(東寄り)	大洞B～C_1
19	〃　B2号　(〃)	不整円形	竪穴(?)	6.5×6.0(?)	有(?)	10	?	石組炉(?)(東寄り)	大洞C
20	〃　CVトレンチ(〃)	円形(?)	竪穴(?)	6.2×3.5(?)	無	16	?	石囲炉(中央?)	大洞B
21	矢口1号　(天童市)	円形(?)	平地(?)	5.3×5.0(?)	無	9	?	地床炉(西寄り)	大洞C_1
22	〃　2号　(〃)	円形(?)	平地(?)	6.3×5.8(?)	無	9	?	地床炉(西寄り)	大洞C_1
23	〃　3号　(〃)	円形(?)	平地(?)	5.4×5.0(?)	無	8	?	地床炉(東寄り)	大洞C_1
24	千葉屋敷1号　(山形市)	楕円形(?)	平地(?)	7.0(?)×6.0(?)	無	5	?	石囲炉　(中央)	大洞B－C
25	上平柳1号　(高畠町)	円形	竪穴	未詳		(4)		地床炉　(中央)	大洞B－C～C_1
26	〃　2号　(〃)	円形	竪穴	未詳				地床炉　(中央)	大洞B－C～C_1
27	八幡原№24 1号(米沢市)	不整円形	竪穴	3.4×3.2	無	12(6)	20	地床炉(?)(北寄り)	大洞B－C
28	朝篠1号　(小国町)	円形(?)	平地(?)	5.8×5.4(?)	無	10(7)	?	地床炉(西寄り)	大洞C_2～A
29	〃　2号　(〃)	円形(?)	平地(?)	5.9×5.5(?)	無	12(7)	?	地床炉(西寄り)	大洞C_2～A
30	〃　3号　(〃)	円形(?)	平地(?)	5.5×5.0(?)	無	7	?	地床炉(東南寄り)	大洞C
31	神矢田2号　(遊佐町)	円形(?)	平地(?)	6～7m(?)	無	17	?	石組炉　(中央)	大洞C_2
32	作野1号　(村山市)	円形(?)	平地(?)	6.2×6.2(?)	?	10	?	地床炉(西寄り)	大洞C_2
33	長者屋敷7号　(長井市)	略円形	平地(?)	5.2	有	14	?	?	晩期
34	〃　8号　(〃)	略円形	竪穴(?)	8.2×7.5	有	14	?	石囲炉　(2基)	大洞A～A′
35	〃　14号　(〃)	円形(?)	?	8	有	?	?	?	晩期
36	〃　15号　(〃)	円形(?)	?	7.5	有	?	?	?	晩期

○本表は、「山形県にみる亀ヶ岡文化の特質と変容」(佐藤庄一『考古風土記第5号』1980)掲載の(表－5)を転載・加筆したものである。
○町下遺跡・砂川A遺跡・石ヶ森遺跡については、現在整理の段階であり、判明している範囲で記載した。尚、石ヶ森1号住居跡は、昭和40年に発掘されている。略楕円形で3.9×4.2mのプラン、中央に地床炉を有し、5本の柱穴と周溝が認められる竪穴住居であるとの報告がなされている。(註14)

以上、要約すれば以下のようになる。

1　うぐいす沢遺跡は村山平野南西部、最上川右岸の河岸段丘に位置する。

2　2次に亘る調査の結果、遺跡は次の時期に形成されていることが明らかになった。

第Ⅰ期	縄文時代中期後葉	大木9式期
第Ⅱ期	〃	大木10式期
第Ⅲ期	縄文時代後期末葉	コブ付土器第Ⅱ～第Ⅲ段階の時期
第Ⅳ期	平安時代	これらの時期については、断片的な資料が得られたに過ぎず、不明な点が多い。
第Ⅴ期	中世以降	

3　今次調査で出土した遺物は、縄文時代後期末葉『コブ付土器様式』の第Ⅰ～第Ⅱ段階に当る（新地1～2式）。石器では掻・削器、打製石斧を主体としている。

4　今次調査で検出された遺構群は、いわゆる「キャンプサイト」である可能性が強い。

5　縄文時代中期の遺構は、段丘東側縁辺から北東部分にかけて、比較的広い範囲で分布するものと考えられる。また、後期末葉の遺構は、今次調査区域を中心に、若干東側へ偏在し、範囲も限定的と考えられる。

6　平安～近世の遺構については不明な点が多い。B地区に散在するピットのうち、いくつかは平安時代～中世の掘立柱建物跡の柱穴の可能性が残される。

（註1）　『山形県埋蔵文化財報告書第41集　うぐいす沢遺跡　第1次発掘調査』　（1981　山形県教育委員会）

（註2）　「山形県寒河江市金谷原の旧石器群」（加藤稔・小林幸雄『歴史19』　1959）

（註3）　「山形県明神山遺跡―第1次調査の概要―」（加藤稔・安彦政信『石器時代10』　1973）

（註4）　高瀬山遺跡群として、『山形県遺跡地図』（山形県教育委員会編　1978）には、高瀬山古墳（429）、高瀬山遺跡（430・縄文時代集落跡）、高瀬山B（431・縄文時代集落跡）、高瀬山経塚（432）が登載されている。昭和55年から56年にかけての寒河江市教育委員会、県教育委員会による3度の分布調査によりさらに数多くの遺跡が新規に発見されている。昭和56年12月に行なった県教委の分布調査については、昭和57年3月に『山形県埋蔵文化財報告書第61集　分布調査9』として刊行されている。寒河江市教育委員会でも現在報告書作成中であり、昭和57年中には刊行される予定である。

（註5）　『山形県史　考古資料』（山形県・1969）

（註6）　高瀬山遺跡群に隣接する三条遺跡（423）では、弥生後期（桜井式併行）の土器の出土が確認されている。（山形大学保管）

（註7）　最近では、昭和55年に寒河江市教育委員会により小規模な緊急発掘調査がおこなわれた。晩期深鉢2個体が出土している。

（註８）　『平野山古窯跡群』（寒河江市教育委員会　1970）

（註９）　「東北地方における縄文後期後半の土器様式」（安孫子昭二『石器時代９号』1969）

（註10）　『山形県埋蔵文化財報告書第57集　町下遺跡』（山形県教育委員会・1982）

（註11）　『高畠町　石ヶ森遺跡　調査説明資料』（高畠町教育委員会　1981）

『歴研月報13－９　石ヶ森遺跡発掘略報』（山形大学教育学部歴研月報・佐藤鎮雄）

（註12）　『村山市史編集資料第九号　作野遺跡遺物集成』（村山市史編さん委員会　1981）

（註13）　『神矢田遺跡　第１次・第２次発掘調査報告書』（遊佐（ゆざ）町教育委員会　1971）『神矢田遺跡　第３次・第４次・第５次発掘調査報告書』（　〃　1972）

（註14）　長者屋敷遺跡については『長者屋敷遺跡・第３次概報』（長井市教育委員会・1981）による。

山形県埋蔵文化財調査報告書第60集

うぐいす沢遺跡

第2次発掘調査報告書

昭和57年2月25日　印刷

昭和57年2月28日　発行

発行　山形県
山形県教育委員会

印刷　㈱大風印刷